
とある都市の三点分岐《T r i p l e R o a d》

天道 界理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市の三点分岐《Triple Road》

【Nコード】

N9904S

【作者名】

天道 界理

【あらすじ】

科学が発展した都市・・・学園都市

光が夜を照らしても光が届かない所は闇に染まる

その闇の中にいたLevel 5

闇から逃げたLevel 5・・・闇に落ちたLevel 5・・・

闇から救うLevel 5

この物語はその3人のLevel 5の物語である

P r o l o g u e (前書き)

最初の方は日常を描いていきます

駄文ですがどうか最後まで読んでいただけたらうれしいです

Prologue

とあるファミレスでのとあるお昼時

「いらつしゃいませ」

店員のあいさつを聞き私は適当に席に座った

「あら、奇遇ね霜月しもつきこんな所で会うなんて。彼氏でも待ってるの」

そう声をかけてきたのはいつも私を組織に誘ってくる麦野あおく 沈利しづりだった

今日は珍しく1人で座っていた

シャケ弁食べながら

「彼氏じゃなくて義弟おとうと。あんたこそ珍しく1人でいて、他の奴らわ？」

「あいつらは今日用事があるって帰った」

「ふーん。で、いつもいる彼氏はどうしたの？」

「あんな変態彼氏なわけないだろ」

そんな紅い顔で否定されても・・・

「その変態つてもしかして僕の事かな沈利ちゃん、空虚くうきょちゃん」

ガバツと音がした瞬間噂をしていたその変態が麦野の後ろの席から麦野にむっかて抱きついてきた

ムニユムニユという音が聞こえそうなぐらい麦野の胸を揉んでいた

「~~~~~!」

声にならない声が店の中に響き渡った後その変態は麦野からの鉄拳制裁をくらっている最中にトイレに私は逃げた

5分後

2人は店長さんらしき人に注意されていた

麦野に至っては全然堪^{こた}えてないけど

変態は麦野からの制裁のほうに堪えていた

まあ自業自得なんだけど

「痛たた。もうちょっと優しく接してくれないかな沈利ちゃん」

「まずてめえの接し方を直せ」

麦野の隣（結局麦野の席で待つ事に）で話している変態・・・紅蓮^{ぐれん}
（皆がこう呼んでいて誰も本名を知らない）が座っている
席順としては窓側に私と麦野、店内側に紅蓮

「それよりこの後どっか遊びに行かない2人も」

「私、義弟待ってるだけだから」

「じゃあ沈利ちゃんだけでも」

「何でお前と2人で行かなきゃいけないんだ」

「えーどっか行こうよ」

と私を無視して2人で仲良く話をしていく

お熱いねまったく

2人が話している最中ふと店内の様子を観察していたら知り合いがいて目が合った

しかしすぐに目を逸らされた

ボーっと窓の外を眺めていたら義弟の満みちるの姿が見えた

「何うれしそうな顔してんだ」

「別にずっと一緒だけど。じゃあ義弟来たから私はこれで」

「なんだあいつが来たんなら霜月がにやけても普通だな」

と麦野が私をからかってきた

義弟の姿を見てにやけていたらしい

恥ずかしい（＊／ω＼＊）

無表情でそんな事を考えながら立ち上がり自分の分のレシートを取
るおとしたら

「それ僕が払っておくから早く行きなよ」

「別にあんたに奢ってもらう必要ないけど、そう言うならお願いし
とく」

「いえいえ。じゃあまたね」

その返事を聞きながら店から出た

「あ、ごめん空虚姉遅れちゃって」

「別に少しぐらい平気よ」

「ありがとう空虚姉。それじゃあ久しぶりに2人の休み楽しも」

と満が手を繋いで引っ張ってくれた

手の温もりを感じつつ満に

「ねえ満、どこに行くのか決めてるの？」

「えーっと最初に、空虚姉が見たいって言ってた映画を見て。夜になるまでって言うか1時間くらいだけど買い物して予約しておいた和食のお店で夕食を食べようと思ってるんだけどそれでいいかな？」

と義弟のできのよさに感心しつついいんじゃないと返事をしておいたはつきり言って満と一緒にならどこでもいいというのが本音だ

「じゃあ満、男の子は女の子をエスコートする」

「んっ、了解」

こうして霜月 空虚の有意義な休日（平日）が始まる

空虚 side end

Prologue (後書き)

読んでくださってありがとうございます
がんばって週一でやっています

オリキャラ設定（前書き）

まだゴールデンウィークなので投稿してみました
今回はオリ主2人の設定です

オリキャラ設定

名前 紅玉蓮こうぎょく れん

年齢 17♂

身長 172 cm

好きな物 食べ物、女の子（特に麦野 沈利）

容姿 髪は赤みがかった茶髪
後ろ髪は上にはねている

かわいい系のイケメン

手足はスラッとしていて長い

服装 常に冬物のコートを着ている（秋冬はコートとダウンの2枚重ね）

その下に季節物を着ている

している コートの下に2本の日本刀『業火』『劫火』とポーチを隠している

性格 飄々ひょうひょうとしている

フェミニニスト

優男

麦野に手を出すやつは容赦ちじやうをしない

能力名 ヒックバン
天体碎き

Level 5 序列第0位

能力 触れた物質に能力を侵食させ発熱、発火、発光、爆発させる能力

最高峰の発火能力系

演算 単数演算重複能力

1つの能力で複数の能力が得られる演算

過去 過去にイギリス清教に所属していた魔術師

魔術師時代では弱冠10才で世界最強の座に君臨した天才
しかし学園都市に興味を持ち12才で魔術から身を引いた
(て言うか逃げてきた)

魔法名 Quaerere 113 (龍の存在を探し出せ)

魔術 超能力と同じ発火魔術
ステイルと違いルーンのカードを使わずに炎を出す

天使『神の命令』サリエルの能力で『神の右席』と同等の
力を持つ

『御前の導き』

全知全能となる能力

その力で超能力者だけど魔術を使用できる体にして魔術を使う

後方のアックアと同じ二重聖人

聖人としての能力でお酒を飲むことで聖痕を開放し思考、筋力、身体能力が一時的に上昇する

いつもは冥土返しに作ってもらったアルコールカプセルで代用している

天使の力を使うか魔術で100%の力を使うと髪が燃えるような赤色に変色する

名前 しもつき 霜月 くうきょ 空虚

年齢 17 ♀

身長 164 cm

好きな物 甘い物、霜月 満

容姿 髪は透き通る様な黒髪
腰までのポニーテール

大人な雰囲気の美女

モデルの様なスタイル

服装
私服はスーツドレス

満とのデートの時はモデルの仕事でもらった服（ブランドばかり）

性格
人間が嫌い

世の中に興味がない

ブラコン

義弟の満の事が1人の男性として好き

能力名
クリアランス
現実逃避

Level 5 序列第7位

能力
触れている物質、物体の実体を透けさせる能力

演算
常時演算処理

無意識下での演算（一方通行を参考にした）
アクセラレータ

過去
チャイルドエラー
元置き去り

その孤児院で満と一緒にだった

ある実験でその孤児院から逃げ出した
その時の恩人が紅玉 蓮

オリキャラ設定（後書き）

次もオリ主オリキャラ設定です

オリキャラ設定2（前書き）

今回も主人公たちの設定です

オリキャラ設定2

名前 しもつき みちる
霜月 満

年齢 16 男

身長 169 cm

好きな物 空虚姉の手料理、霜月 空虚

容姿
髪はおとなしい黒色
髪質はやわらかいショートヘア

母性本能をくすぐるような優しい系のイケメン
普通の男性より細く見える

服装 暖色系の服を中心に着る

性格 優男

理性が強い

我慢強い

義姉の空虚の事を1人の女性としてみている

紅玉 蓮れんの事を兄のように慕っている

能力名 AIMストッパー
能力停止

Level 4

能力 相手のAIM拡散力場に干渉し相手の『自分だけの現実』
とAIM拡散力場との関係を希薄にして能力を発動しにくくする能力

過去 チャイルドエラー
元置き去り

ある実験で一緒に施設にいた空虚と逃亡

名前 てんどう
天道 かいり
界理

年齢 17 ♂

身長 176 cm

好きな物 辛い物

容姿 髪は黒が混ざった茶髪
髪は全体的にバサバサしている

ワイルド系のイケメン

けっこう筋肉質

服装 青いアクセサリを必ずつける

性格 知り合い以外に冷たい

面倒臭がり

インドア

喧嘩っ早い

ティアを大切に思っている

能力名

ディストーター
立入禁止

level 5 序列第1位

ディドリーマー
空想具現

能力

ディストーター
立入禁止

全空間を操作する能力

ディドリーマー
空想具現

精神空間が脳内空間と現実空間を接続し干渉する能力

精神空間の場合 界理か界理に近いものしか干渉できない
脳内空間の場合 界理が演算できる範囲でしか干渉できない

なる

ディドリーマー
『空想具現』を使っている時は髪と眼の色が空色に

演算

重複演算累乗能力

同じ能力を複数演算すると2重で演算すると4倍、3重で

演算すると9倍になる演算

最大ストックは8ストック（そのうち5ストックが無意識
下での演算）

過去 暗部に妹を殺された

その時に空想具現デイドリマーを使えるようになった

名前 ティア・ビーナス

年齢 16 女

身長 158 cm

好きな物 洋菓子、天道 界理

容姿 髪の色は煌くようなブロンド
髪は腰にとどくロングヘアで後ろでくくっている

中性的な顔立ちをした美少女

普通の女の子よりスタイルはいい

服装 界理を真似て青いアクセサリをつけている

性格 お人好し

少し天然

嫉妬深い

界理に押し倒されてもいいと思っている（て言うか押し倒してほしいと思っている）

不意打ちには弱い

魔術

ティア・ビーナス
女神の涙

能力

自分の体内に膨大な量の『天使の力^{テレスマ}』を呼び込みためる能力
ため込める量は天使1体分以上

1体分以上の量をため込むと体に異常をきたす

1年間に天使1体分の量が入り込む

しかし1年に5%の量の『天使の力^{テレスマ}』が抜ける

発動するには15才の誕生日を迎えた時から

死ぬまで永久に発動し続ける

詳細

1年≡90%

1年20日≡100%

過去

元イギリス清教のシスター

この特異な体質のせいでいろいろな教会から狙われた

ある日処刑塔^{ロンドン}に投獄されたが紅玉 蓮に助けられた

ちなみにこの世界でのLevel 5の序列は

第0位	紅玉蓮 ビッケバン 『天体砕き』
第1位	天道界理 ディストーター 『立入禁止』 アクセラレータ
第2位	一方通行 アクセラレータ 『一方通行』
第3位	垣根帝督 かきね ていとく ダークマター 『末元物質』 みさか みこと
第4位	御坂美琴 レーलगアン 『超電磁砲』 むぎの しずり
第5位	麦野沈利 メルトダウナー 『原子崩し』 しよくほう みさき
第6位	食蜂操祈 メンタルアウト 『心理掌握』 しもつき くうきよ
第7位	霜月空虛 クリアランス 『現実逃避』 そぎいた ぐんは
第8位	削板軍霸 不明

オリキャラ設定2（後書き）

次話から話を進めていきます

とある紅蓮の強引約束（前書き）

今回は紅蓮の休日です

とある紅蓮の強引約束

紅蓮 side

(この後どこに行けばいいかな)

と考えている時今日公園でクレープ屋が何かキャンペーンをしているの思い出した

「そうだ沈利ちゃん、公園でクレープ屋さんがあるから食べに行こ」
「だからなんでおまえと・・・で何で手繋ぐんだよ」

と無理矢理沈利ちゃんの手を繋いで店を出た

「あつたあつたここのクレープ屋さんだよ」

そこには車を改造して作った移動式のお店があつた

「僕はストロベリーにするけど沈利ちゃんは何にするの？」

「私のは適当に選んでおいて」

「うんわかったよ。はっ、もしかして沈利ちゃんは選んだクレープで僕のセンスをはかる気なのかい？」

「何で私がそんなめんどくさい事しなくちゃなんないんだ」

「それもそうだね。じゃあ買ってくるから少し待っててね」

そう言いクレープを買いに行った

「先着100名様にゲコ太ストラップね」

この微妙なキャラクターのストラップの事で考え事をしていたら後ろの女子中学生たちが

「このいかにも手抜きそうなストラップ欲しい人なんているんですかね御坂さん^{みさか}」

「ほ、本当よねこんなストラップ誰がいるのよね。まあくれるんならもらってあげてもいいけど」

本当は欲しいくせに

と後ろの中学生の会話を聞きつづやいた

よく見ると2人のうち一人の方が有名なお嬢様学校の常盤台^{ときわだい}中学だった

お嬢様でもこんなの欲しいんだ

と少し幻滅していたら自分の番になり注文をした

「えーっと、ストロベリーとブルーベリーを1つずつ」

「はいよ」

と愛想のいいお兄ちゃんがクレープを焼いていく

沈利ちゃんの事だからどうせストロベリーを食べるだろうと思う
どうしてかというと僕がさっきストロベリーって言ったから

なんたって沈利ちゃんはツンデレのはずだから

なんてしょうもない事を考えているうちにクレープが焼けていた

「ストロベリーとブルーベリーお待ちどう。それと最後の1つのストラップ」

をもらったと同時に後ろの中学生がひざから崩れ落ちた

「大丈夫ですか御坂さん？」

「大丈夫・・・のはず」

この子そんなに欲しかったのな
まあ僕はいらなから

「ねえ君、そんなに欲しかったらあげようか？」

「えっ、くれるんですか！」

目が輝いてる

どんだけ好きなのこれ

「じゃあどうぞ」

「あ、ありがとうございます！」

ストラップをあげるとご機嫌な様子の御坂さん

ああ、やっぱり女の子っていいね（´、`）

クレープを持って沈利ちゃんの所に向かう僕
すると木の影に隠れているベンチに座っていたので少しいたずらを
考えた

そうだ、後ろから抱き着こう（あほな発想である）

「おい沈利ちゃん。お・待・た・せ」

で抱きついた

4分後

当然のごとく抱きつかれた本人は驚くと同時に抱きついてきた本人を殴ってきた

いたたた（<―>）

「おまえってこれ以外に話しかける方法はねえのかよ」

そう怒りながらストロベリーのクレープを食べる姿がとっても可愛い

けどやっぱりストロベリー食べてる

「聞いてんのか紅蓮^{くれん}」

「あごめん、聞いてなかった。それで何だっけ？」

「てめえのそのセクハラだよ」

いきなり顔に『^{メルトダウン}原子崩し』こと粒機波形高速砲が飛んできたが、間一髪のところを避けた

「あ、危ない。後ろに人いたらどうするの沈利ちゃん」

「そこで人の心配かよ」

そんな他愛もない一時をすごしていく僕
しかしそんな幸せとはほど遠い事がすぐ近くで起きているのは僕は
まだ知らない

紅蓮 s i d e c o n t i n u e

とある紅蓮の強引約束（後書き）

次も紅蓮sideです

感想もお待ちしております

とある紅蓮の悪党退治（前書き）

今回はとある科学の超電磁砲を絡ませました
少し強引ですけど・・・

とある紅蓮の悪党退治

紅蓮 side

ちようど食べ終わったところ何やら不穏な気配がしたため少しあたりを見渡した

すると遠くの方で銀行のシャッターが下りていて

「ねえ沈利ちゃん」

「何紅蓮？」

「あその銀行何でシャッター閉まってるんだろね」

「確かに、けど定休日じゃないの」

「後で銀行よろうと思った「ドガンッ」えっ、何の音！」

音がした方向を見てみると銀行のシャッターが壊れていた

「ちょっとお節介だけど行ってくるかな」

「事件に巻き込まれて死んでこい」

「ははっ、冗談きついよ」

沈利ちゃんの笑えない冗談を聞きながら銀行にむかった

「うわー、なかなか派手にやったねこれ」

道路には先ほどの爆発の跡が残っていた

「『ジャッジメント
風紀委員』ですの」

そんな声が聞こえ腕に腕章をつけたツインテールの女の子が犯人グループらしき男たちの前に立ちふさがった

「なんだ中学生が出てくるなんて『ジャッジメント風紀委員』も人手不足なのか」

そんな三下な死亡フラグ言っちゃダメじゃないのかな

「そのセリフ、死亡フラグですよ」

と同時に犯人の1人が捕まっちゃった

言わんこっちゃない

後2人ぐらいかな・・・

「このガキ」

犯人の1人（めんどいので犯人Bにします）が手から炎を出していた

『パイロキネシス発火能力』のLevel 3くらいかな

まあこっちはほっといても大丈夫だろうけど後の犯人Cがどこに行つたか・・・

「放してください」

「うるせえこのガキ」

となんと犯人Cが男の子を人質いしようとしていたがさっきの女の子がそれを阻止していた

犯人Cがしびれを切らしたのかその女の子の顔を蹴ったのだった

あいつ、女の子を蹴るとか男の風上にも置けねえ

女の子は男の子を守り抜いたが犯人Cは車を使って逃げようとしていた

「ねえ黒子、これは私の喧嘩だから手出さしてもらうわよ」

おっと、『超電磁砲^{レールガン}』が出てきたら被害が大きくなるからなよしつ、止めよう。一応僕の責任もあるし

「ねえ、御坂^{みさか} 美琴^{みこと}ちゃん、今回は我慢してもらおうかな。それに女の子が暴力を使っちゃダメだよ」
「え、あんたいつの間に」

まあ驚くのも無理はない
だって今まで能力を使って姿を消していたのだから

「友達が暴力を振るわれて怒るのもわかるけど、今回は我慢してくれないかな？これじゃあ学園都市1のフェミニストの名前が廃るから」

「ちよっあんた何勝手に、て言うか何で私の名前を」

ちよっと強引に場を収めた

ちよっど車がこっちにむかって走ってきた

って、轢き殺す気（○Д○；）

少し前に出ると車が目の前まで迫ってきた

「危ない！」

言ったそばから車が僕に突っ込んできた
すごい音を立てて吹っ飛んだ
しかし飛んだのは僕ではなく車の方だった

御坂 美琴は車が吹っ飛んだ光景を目の当たりにした

（ありえない、むかつてくる車を蹴り上げるなんて）

車は弧を描いて空を飛んでいた

しかもその蹴った本人は平然と立っていた

（あいつ何者？）

その単語が思い浮かんだ時にはすでにいなくなっていた

紅蓮は事を終えて麦野の所に戻っていた

「久しぶりにどうだった偽善事業は」

「ひどいねその口ぶりは。別にどうもないよ」

「そう、じゃあ私はそろそろ帰る」

「送っていいこうか？」

「いらないわよ」

「わかった。じゃあね沈利ちゃん」

「じゃあね学園都市最強」

ははは、と苦笑いを返した

ほんと沈利ちゃんは可愛いな

紅蓮 side end

とある紅蓮の悪党退治（後書き）

いやー、強引ですね

次はなんとお気に入り主人公の登場です

紹介はしていますが出てきたのは一回の可愛そうな主人公です
感想は欲しいですね・・・

とある界理の予測不可（前書き）

やっとこの人を出す事ができましたが表現力が・・・

とある界理の予測不可

界理 side

「あ、これ会計お願いします」

紅蓮くれんの声が聞こえた

別に知り合いに会ったからテンションが上がっている訳ではない
むしろなんでこの店にいるのかがいらいらする
確かにこの街にいたら会うだろうが頻繁ひんぱんに会ってたら飽きるだろ

ハァー、考えててもしかたないから家に帰るか
その前にゲーセン寄ろかな

そんな事を考えながら店を出た

適当に街を歩いていたら路地の方からこちらを見ているやつらがいた
あと何人かは俺を尾行していた

ひー、ふー、みー・・・たかが13人で俺を倒せるはずねえだろう
によ

いつもこうである俺を倒して名を上げようとする不良どもがいる
不良スキルアウトどものお遊びに付き合ったため通りから路地に入った
そしたらいきなり金属バットを持ったやつが殴りかかった

キシヤーン

金属と金属を擦りあわせたような音が鳴り響いた
殴ってきた不良は手が痺れてバットを落とした
殴られた方は何事もなかった様子だった

「おい、あんたらよこっちも暇じゃねえんだからよ早く終わらせてくれ」

その安っぽい挑発に乗ってきたリーダー格の男は半ばキレながら

「さっさとやっちまえ。相手は1人だろが」

言われた不良は各々の武器を持ち一斉に向かってきた
スキルアウト

キシヤーン キシヤーン

「何でこいつにあたらねんだよ」

「おいもう終わりかよ。じゃあ次はこっちの番だよな」

十数分の間路地は阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄絵図となった

その後『風紀委員』ジャッジメントが現場に着いた時には地面や壁が重機のような物で削られた跡が残っていた

しかしその現場では重傷者はいたが死亡者はいなかった

その現場を作った本人は先ほどの惨劇さんげきを作った後とは思えない様子でゲーセンにいた

「そろそろ家に帰るかな」

かれこれ2時間はこの場所で遊んでいた
格闘ゲームの椅子の上で体をほぐしていたらUFOキャッチャーが
見えたのでそれをしてから帰ろうと思った

でっかいウサギのぬいぐるみを不良っぽい男が持っている奇妙な風
景があった

勢いでとっただけどうする

と悩んでいたら少し後ろで小さな女の子が欲しそうな目で見ていた

1 無視する

2 あげる

2 「おまえこれ欲しいのか？」

「え、お兄ちゃんくれるの！」

女の子はそのぬいぐるみをもらいとても喜んでいた

「ありがとうお兄ちゃん」

そんな温かい笑顔をむけられ女の子は走り去った

かいり
界理は暗い路地を歩きながらさっきの女の子を思い出していた
優しく温かい笑顔

俺にはそれをむけられる資格はないのに

そんな事を考えていたためいきなり横から曲がってきた少女にきずけずぶつかった

それがティアとの出会いだった

界理 side continue

とある界理の予測不可（後書き）

次もこの方のルートで

感想待ってます！

とある界理の少女救出（前書き）

ついに来たー！ー！

この主人公のヒロイン

とある界理の少女救出

界理 side

「どうすんだこいつ」

界理^{かいり}はぶつかって気絶した少女の様子をうかがう

普通の人は路地裏は暗くてよく見えないが界理には関係がなかった
常時演算型の空間把握で半径1km内にある物を把握する事ができる

よく観察すると髪はきれいな金髪^{ブロード}だった

海外から学園都市に来たやつか

しかし界理はこの生徒ではないとはすでにわかっていた
この少女からAIM拡散力場が感じられなかった
がこの少女に興味がないため

置いて帰ろうかな

そんな薄情な事を考えていたが少し状況が変わった
界理の50m後ろでこの少女の事を見ているやつらがいた

こいつらもここの人物じゃないな

その男たちの服装は少女の着ている物によく似ていた
まるで修道服のようだった

しかし少女の着ていた服はところどころ破れていてきれいな素肌と

傷ついた肌が見え隠れしていた

この状況で捨てて帰るやつは本当の鬼であるがいつもの界理だった
らしていたが今回は一応加害者のため

「しゃーなし、連れて帰るか」

少女の体の下に手を入れてお姫様抱っこの要領で持ち上げたと思っ
たらすでに消えた

修道着を着た一人の男があわてた様子で上司らしい男に

『報告します。『ティア・ピーナス女神の涙』が何者かによって連れ去られました』

(『』の中は外国語です)

『連れ去られただあ。それだったら追いかけるよこのクス共が』

『し、しかし『ティア・ピーナス女神の涙』を持ち上げたと同時に消えたので追跡す
る余地がなかったのだ』

『へー、消えたってのか。まあ俺たちの邪魔をするやつらは全員神
の敵だ』

そうその男は不気味に笑っていた

そのころ界理は先ほどの少女を自分のベッドに寝かせていた

服は破けていたので捨てて界理の青いパジャマを貸した(もちろん
本人は寝ているので着替えさした)

怪我もしていたので着替えさす前に手当てをして代謝能力が上がる
空間を作った

1時間したらその少女は目を覚ました

『ここは・・・』

と少女はきれいな声で英語を話したあたいイギリス人と推測した
一応礼儀として英語で

『ここは俺の家だ』

そう答えた時少女は身を強張らせた
確かに暗い場所からいきなり声が聞こえたら誰だって警戒はする

『安心しろ、追っ手じゃない』

『君は？』

『学園都市の人間だ』

それを聞き警戒を緩めた少女
自分の体を見て怪我の手当てをしているのを見てたずねてきた

『どうして私を助けたの？』

まあ誰もが予想できるな

『俺に当たって気絶したから』

『それだけ？』

『それだけ』

少しあきれていた

「ねえ、ひとつ聞いてもいいかな？」

日本語しゃべれるのかよ！

「別にどうぞ」

「えっと、おなか減っちゃって・・・」

「その前に名前、何て言うんだ？」

「名前、私の名前は・・・ティア・ビーナス。君は？」

「俺は天道 界理」

「よろしくね界理」

そんなことで久しぶりに他人と一緒に食事をした
もちろん俺が作った

界理 s i d e c o n t i n u e

とある界理の少女救出（後書き）

この次も界理君のお話です

とある界理の世話介抱（前書き）

少し明るい話題なんですが早くも設定が・・・

とある界理の世話介抱

界理 side

7時ごろに夕食を食べた

家にあつた食材で和食を作った

外国人だから箸は使えないと思い和食にした

案の定フォークとスプーンを要求してきた

そんな感じで楽しい食事を過ごした

「ごちそうさま界理^{かいり}」

「あいよ」

食べ終わり一応聞いておかなきゃいけないことを聞いた

「なあティア、どうしてあいつらに襲^{おそ}われてたんだ？」

「それは君には言えない。私に関わると取り返しがつかなくなるから」

取り返しがつかなくなるからねか、今の状態でも十分取り返しはつかないと思うがな

「まあ言いたくなかったら言わなくていいが」

「ありがとう界理」

「言わなくてもいいが最低でも3日は家でじっとしてる。それくらいで傷は完治するはずだ」

「わかった。それとね界理・・・」

「どうした？」

「お風呂、入ってもいい？ずっと逃げててゆっくり休めなかったから水浴びくらいしかできなくて」

「・・・」

「だめかな？」

ブロンド
金髪の可愛い少女が上目使いでこっちを見てきた

しかも俺のパジャマが少し大きいのか年相応（いや、少し大きい）の胸の谷間がソファアに座っている俺によく見えた

ここで普通の男だったらこいつはどうなっているかわからないな

まあ断る必要もないし怪我の方もだいぶましになっているから別に大丈夫か

「別にいいけど服の方はどうすんだ？」

「えっ」

忘れてたのかよ

とは思わなかった

予想通りであきれるくらい

だがこの問題は結構重大なためまじめに考えた

考えたがひどい答えのため却下した時予想外のことを言ってきた

「下着・・・洗ってくれないかな？」

ちょうど俺が却下した答えを答えやがった

男に下着の洗濯を頼む女子をはじめて・・・・・・・・・・いや、いたな

もし世にこのような事を言う女子がいたらすぐに襲われるなど心の中ですぐやいてみた

俺が健全な男子じゃなくてよかったな

「わかったそれでいくからさっさと入れ」

「ありがとう」

覗かないでよと釘を刺されたがあまり意味がない
なぜかは秘密にしておく

ティアが風呂から上がって俺のパジャマを着ていた（下着の方は無駄に能力を使って乾かした）

「お風呂ありがとう」

言うなりソファに座った

数分たって疲れていたのか船漕ぎ出しついに寝てしまった

こいつは男に対する危機感がないのか

眠っているティアを自分のベッドまで運んで寝かした

物音で目が覚めないように自分の部屋の周りに防音の空間を作った
ふと自分が今した行動に疑問を感じた

何でこいつの世話を焼くのを楽しんでんだ

昔の俺なら無視していた事を今は自分から進んでやっていた
自分に関係がないことは無視をしていた

ぐれん フラグメイカー
紅蓮やあのお節介はいつもこんな事を1人でしているのか

そんな疑問を空が明るくなるまで1人で考えていた

界理 side continue

とある界理の世話介抱（後書き）

もっ少しで他のキャラが出てこれそうです。

とある界理の三日経過（前書き）

今回は出来がいいと思っています

とある界理の三日経過

界理 side

3日後

ティアは界理^{かいり}に見つからないように家を出ようとしていた

「服、どうしよう?」

家を出るうえで一番の問題だった

最初に着ていた修道服は界理が捨てたと言っていたから

しかしティアのそんな解答はベッドの横に服が一式置いてあった
男物の青いTシャツと短いジーンパンと白いつば帽子

優しいんだね界理は

まるで最初から界理に会わず出て行くことを予想していたかのように

「ありがとう界理」

事情も聞かず無償で私を助けてくれた優しい人

そんな優しい人を私の私情で巻き込むわけにはいかなかった

「あなたに神のご加護があらんことを」

それを最後にティアは家を出て行った

――――
『あなたに神のご加護があらんことを』

そう玄関の方から聞こえた

出て行ったか

最後のあのセリフは笑える

シスターをやめたといって言ったのに俺に神の加護を与えようとす
るのが笑えた

自分の身より人の心配かよあのガキは

「もーあいつとは関係ねーけど」

悪態はついた物の自分の喪失感を感じていた
それを考えないようにソファーで目を閉じた

昼になり目が覚めた

まだ寝足りないが無理矢理起きた

顔を洗うため洗面所に向かうついでに家にある食料を確認した

「ちっ、何にもありやしねー。外に食いに行くか」

しぶしぶ外に朝飯という名の昼飯を食べに出かけた

3日前にも来たファミレスでご飯を食べていた
そしたら案の定近づいてくる人影があった

人が1人で機嫌よく食べてるつてのによ

そんな事を思っているとは露知らず（たぶんわかっているが）話しかけてきた

「やあやあお久だね界理君」

「てめえの顔なんていつでも見えてんだよ紅蓮^{ぐれん}」

「うれしいね友達の事をずっと見ていてくれるなんて、僕はなんてできた友を持つているのか」

はあー、いつも思うがこいつはわざとこんな事をしてきて楽しみやがる

ほんと男にはえんりようがない

しかも勝手に俺の飯食ってるし

「それよりこの3日間全然見なかったけど体調でも悪かったの？」

「そんなありえねえ事言うな。それに心配なんかしてねえだろ」

「ははっ、確かに心配はしてないけど最近何してたのかは聞きたいね」

そう聞かれて少し躊躇^{ちゅうちよ}した

こいつに話したらどうなるかわかったもんじゃないからだ
だが話さなかったら話さなかったらで厄介だ

しかたない安全な方で行くか

「別にただ家出のがめんどくさかったただだよ」
「ふーんそうなんだ」

疑いの目で見てきやがる
だから嫌いなんだよこいつが

「まあ一応他人のプライベートだから詮索はここまで」

「ああそうしてくれ」

「界理君が金髪ブロードの美少女でも介抱かいほうしてたら面白かったのにな」

ドキツと心臓がなったような気がした

あまりにも的を射すぎた答えでポーカーフェイスが少し引きつった
かもしれない

「そんな事はないと思うけどね」
「……」

こいつは人を見透かした物言いで話してきた
けどこいつはこんな事のために来たわけではない

「世間話はもういいだろ、本題を言え」
「なーんだ、解ってたの。仕方ないじゃあ今回の仕事は……」

この仕事は別に暗部の仕事ではなく紅蓮が『ジャッジメント風紀委員』や『アンチスキル警備員』
などから情報を盗み出してやっている物だ
だが今回の仕事は結構深いところの物だった

その仕事の内容はあの少女に関するものだった

界理side continue

とある界理の三日経過（後書き）

次は新キャラ出てくれるかな？

それと紅蓮さんの魔法名を書いて置くのを忘れていたのでキャラ設定で追加しておきました。

とある界理の仕事内容（前書き）

今回は新キャラを出してみました
ではどうぞ！

とある界理の仕事内容

界理 side

仕事の内容は学園都市に侵入した人物の拘束及び学園都市からの排除だった

侵入者は男が十数人だけ

拘束の場合担当者が管理するようになっていた

「それとね界理君、期限が1週間しかないんだけどいける？」

「たかがこれくらいの事に1週間もいらねえよ」

「じゃあ引き受けてくれるんだねこの仕事」

よかったー、と言っていた

紅蓮ぐれん自身でやる方が早く済みそうなのにこっちに回してくる

それにしてもこの資料にティアの事が書かれていなかったのが少し妙だった

家に戻りソファーに座って計画を立てていた

紅蓮が渡した資料にはこの男たちの情報はあるがティアの情報が一切無い

わざとその情報だけを隠している可能性が無くはない

その隠している人物が統括理事会かもしくは・・・紅蓮

あいつの情報網は侮れないからな

けど、お前は俺に何が知られたくない

目が覚めたら朝になっていた
知らない間にソファで寝ていたらしい

風呂でも入るか

さすがに7月は暑かったために汗をかいていた
脱衣所に行き服をかごに入れた

冷水で体を流している間考え事をしていた

あいつは今頃何してんだろな

そんな事を考えるくらいこの仕事が謎だった

数時間前

「はぁはぁ」

ティアは修道服を着た男たちから逃げていた
今は路地裏の入り組んだ所で朝になるのを待っていた
男たちは光が出ている時間は行動しない事を知っていた

「まるで太陽を嫌う吸血鬼みたい」

今の状況に釣り合わない冗談を口ずさんだ

数十分が経ち何かを思い出したようにあたりを見回した

「ここ、界理の家の近く」

そう言った瞬間いきなり自分以外の声が聞こえた

「やっと見つけたよ、お譲ちゃん。おじさんずっと探してたんだよ」

その声が聞こえた方を振り向くとそこには190cmはあろう男が立っていた

「・・・オレイ・・・カルコス」

「おつ、ちゃんと俺の名前覚えてたんだな」

オレイカルコス

ローマ正教所属の魔術師で『神の右席』の次に危険な人物

この男は危険だ、どうにかしてここから逃げなくちゃ

そう判断するのに時間はかからなかった
しかし、

ガシャンッ

「おいおい、お譲ちゃん。ここから逃げられると思ってんのかい」

虚空から巨大な金属の十字架がいきなり現れ進路をさえぎられた

「まあそう緊張しなさんさ。こっちも手荒なまねはしないからよ」

「その保障はどこにあるの」
「っんー・・・ないな」

そういつた瞬間後頭部からの鈍痛で意識を手放した

「じゃあ、ちゃっちゃと終わらせるのろま共。慎重に運べよ慎重に」

そう部下に命令を下していい事を思いついた

「あつそこのお前」

「ハイ、何か」

「そいつから帽子脱がせてそこらへんに捨てておけ」

「何故でしょうか？」

「いいから上司の言う事は何でも聞け。それとも殺されてえってのかい」

「わ、わかりました！」

そう言い急いで帽子を脱がしに行った

「近々いいことがありそうだな、久々に」

ティアのやつがもらした事実が本当ならあいつの知り合いがこの辺に住んでる

そう考えただけで不気味な笑みがこぼれた

――――

今現在

風呂をあがってから近辺を見ていたらティアに貸していたはずの帽

子が見えた

そばまで行くと置手紙まで用意されていた

「結局捕まったじゃねえかあのバカは」

手紙を読むと『助けに来い』と言う命令形の内容だった

界理side continue

とある界理の仕事内容（後書き）

読んで下さいますありがとうございます

一応十字架の方はエピソードさんのを使わしていただきました

図々しいですが感想をもらつとうれしいです。

とある界理の戦闘準備（前書き）

今回はまあ大丈夫でしょう

とある界理の戦闘準備

界理 side

『夜の10時に噴水のある公園に来い』

そんな強制された脅迫文^{きょうはくぶん}を俺は一度も、もらった事がないだろう

「あの馬鹿は俺が行くまで無事って言う保障はないな」

いつもなら知り合いが事件に巻き込まれようが感心が無いが、

「自分から出てきてくれんのはありがてえな。仕事が速く済む」

この男は自分の利益でしか動かない
そういうやつだった

しかし内心は嬉しさもあいまっていた

p r r r r r r p r r r r r r

そんな無機質な音が部屋の中を響かせた

p r r ピッ

『ヤッホー、ハロエヴィバーディッ』
ピッ

少し嫌な夢を見た

紅蓮ぐれんが俺に電話をかけるという嫌な夢

p r r r

『何で切ったの!』

「めーわくなんだよ昼から」

『昼だったらいいんじゃないの』

「ちっ、で用件わ」

『えつとね、ただ暇だったただだよ』

「じゃあな」

『ストーッブ! 嘘嘘、今日の夜ご飯食べに行かないか聞こうと思っただけ』

「そうかじゃあ行かね」

『もー、そろそろ他人と付き合ってもいいんじゃないかな』

「他人に制限されんのが嫌なだけだ」

『ふーん、わかった。じゃあまた今度誘うね』

「別に誘わなくていい」

じゃあね、と言って紅蓮は電話を切った
いつものあいつならもう少し粘ろうとしていたが今回はあっさり引いた

やっぱりあいつは何でも知ってたんだな

そんな言葉で嫌味を加え眠りについた

かいり
界理君大丈夫かな

紅蓮は界理に渡した今回の仕事を思い出す

今回の仕事はただの暗部の仕事ではない

科学ではない別の存在——魔術師まじゅつしが関係している

「はあー、界理君がティアちゃんに会わなかったらな」

そんな後戻りができない事をつぶやいた

――――――――――

午後9時

約束の1時間前に起きた

かれこれ10時間以上寝ていたが目が覚めない

それほど日ごろから寝不足である事がわかる

「腹減った」

適当にお菓子を見つけ食べて支度を済ました

指定の時間より少し早く待っていたら向こうもこちらに来た

「あれー、君が『女神の涙』ティア・ビーナスの知り合いかい。それにしても早く着すぎじゃないかな。そんなに彼女に会いたいのか？」

「てめーは外人だから知らねえが、この国には10分前行動つてのがあるんでな」

「へー、この国の人はそんなすごい事があるんだね」

こいつの第一印象はチャラ이었다
へらへらしてて紅蓮に似てむかついてきた

「早く用事を済ませたいんでな、率直そつちよくに言う。あいつはどこだ？」

「あー、あの子はうちの連中がしつかり監禁かんきんしてるから心配するな」
「ここにはいないんだな」

「ああここにはいない」

「なら言っておく、俺の私物に手え出すな。出したらそこで殺す」
「わかった、出さないでおいてやるよ。その前に名前なんて言うのかい」

「天道 界理」

「そうかい、僕はオレイカルコス。じゃあ・・・」

一息おいて同時に同じ言葉を話した

「「さつさと死ね!!」」

それを合図にしたかのように二人の戦いの火蓋ひふたが切って落とされた

界理 side continue

とある界理の戦闘準備（後書き）

なんだかんだで次で始めてバトります

感想もお願いします。

とある界理の油断大敵（前書き）

戦闘描写を初めて入れましたけど上手く書けませんでした
なんだかんだで見えていってください

ではどうぞ

とある界理の油断大敵

界理 side

「「さつさと死ね!!」」

両者は拳を握り顔をめがけて打ち出した

ガンッ

と言う音と共に両者はお互いの拳の威力で界理は車道に、オレイカルコスは公園の奥にそれぞれ吹き飛んだ

界理は普段『立入禁止』で無意識に3つの空間を造っている

『空間断絶』 自分の体の周りに別の空間を造り自分が不愉快だと思

うことを無意識に防ぐ

『能力無効』 『空間断絶』で分離した空間内で超能力を使えなく

する空間

『空間把握』 自分から半径1km以内の空間を視覚、聴覚で感じ

る空間

どれも能力のストックは1つしか使わない

『空間断絶』でオレイカルコスの拳を防いだはずだが界理の頬には確かな痛みが走っていた

「おいおい、もうお終いかい」
「はっ、誰が」

内心どうしてオレイカルコスが立っているのか不思議であった

『空間断絶^{セバレスト}』を通して行う一撃は戦車砲以上の破壊力を持っている
だがオレイカルコスは右の頬にひび割れができていただけだった

ひび割れ？

どうして人間の皮膚にひび割れができてんだ

「しかしすごいね君、まさかオリハルコンの装甲にひびが入ったんだからさ」

「そらどうも」

それと同時にまた両者が拳を交えた

ただ殴る、殴る、殴る、蹴る

そんな路地裏の喧嘩のような戦いでも両者の周辺は大きな傷跡を残している

「久しぶりだなこんな楽しい殺し合いは」

「そんなもん、こつちもこんなに殺りがいいのある仕事はねえよ」

それと同時に界理がその場所から消えた

「だから終わりにしようぜ」

オレイカルコスの後ろにいきなり現れ蹴りの構えを取った

「三次元切断一刃」

『三次元切断一刃』 『空間移動^{テレポート}』の要領で空間を切り裂く技

オレイカルコスは危険を察知したのかすぐさま攻撃を防ごうとした
が意味がない

文字通り空間ごと物体を斬るのだから

ガシャーン、と何故か金属音と共に蹴りを止められた

オレイカルコスの右手にある自分の身長以上の巨大な十字架で止
められていた

その十字架にも少しの傷しかつけなかった

「ほー、こりやまたすごい。僕の十字架に初めて傷がいったよ」

「何だよその十字架は」

「『オリハルコン』って知ってるかい」

「そんなもんゲームやマンガのもんだろ」

「まあそうなんだけど、それを扱うのが僕の魔術さ」

「魔術だと・・・」

「君も薄々気付いているだろ、僕たちが君たちと違う力を使う者――

――魔術師さ」

確かにこいつの体からA I M拡散力場が放出されていないにもかか
わらず得体の知れない力を使う

それにこっちの能力が全然通用していない

「で、それがどうしたってんだ。殺すのにそんなの意味ねえだろが」

「それもそうか」

今度はむこうから動き出した

手に持っていた巨大な十字架を投げてきた

対してこっちは路上駐車してあった2台はあるトラックを空間を操
作して持ち上げ投げた

お互いがぶつかり合いトラックが爆発した

爆発した炎の中からオレイカルコスが追撃に来たがそれも視えていたためこちらにもむかつて行った

十数分は殴っていた

ドゴツ、ガキンツ、ガシャン

どれも人間同士が殴り合いをする音ではなかった
しかも笑いながら

「はははははははは！」

界理が殴ればオレイカルコスが殴る

オレイカルコスが蹴れば界理が蹴る

そんな単調な攻撃だがその被害は噴水が折れ、地面にクレーターを
造るほどの被害

「久しぶりにこんなに楽しい殺し合いをしたのは」

「そうかよ。こっちはつい先月に知り合いとしたばっかなんだけど
な」

そんな会話をしながらも界理は周りの一般人が遠く離れた場所まで
いない事に疑問を抱いていた

そんな感情を読まれたのかオレイカルコスが

「一般人にまで心配をかけてるのかい。大丈夫だよここには絶対に
こないよ。いや、これないって言う方がいいかな」

「じゃあ周りに気にしなくていいって事だよなあ！」

そう言ったと同時に界理の拳の周りの空間に変化が起きた
それに気付いてオレイカルコスがさっきの十字架を取り出した

「圧縮空間振動砲！」

瞬間大気が震えたような感じがした

いや、界理の手によって空間が震わされた

すると見えない何かがオレイカルコスの方に向かってものすごい速
さで突き進んでいった

その見えない何かの前に十字架を盾にした
十字架にぶつかり激しい音を立て空間に霧散——むさん——せず十字架を突き
抜けた

「！！」

完全に防げたと安心していたオレイカルコスの体に叩き込まれ、1
0 mほど吹っ飛ばされ動かなくなった

「やっとのびたかあの野郎」

そう言いオレイカルコスの方に近づいていった

そこで戦いに集中しすぎて周りを見ていなかった事に気がついた

「界理！！」

その声に反応して振り向いたと同時に視界の端で何かが動き胸に強
い痛みが襲ってきた
よく見ると胸から透明な金属の剣が突き刺さっていた

「だめだよそ見しちゃ。ちゃんととどめさしてからじゃないと」

その言葉と同時に意識が消えた

界理side continue

界理の技の解説

『セバレスト空間断絶』

本文の通り自分の体の周りに別の空間を造り不愉快だと思っ事を防ぐ防御能力

絹旗さんの『オフエンスアーマー室素装甲』のような物で想像していただけたらと思います

1ストック

『AIMアウト能力無効』

『セバレスト空間断絶』で分離した空間内で超能力が消滅する空間
主に『テレポート空間移動』などの直接的ではないもので防ぐ防御能力
1ストック

『オールチェック空間把握』

自分からの半径1km範囲内の空間を視覚、聴覚で感じる空間
大体の能力はこの空間内でしか能力は使えない
1ストック

『テレポート三次元切断一刃』

『空間移動』の移動先の物体を押し出して移動すると言っ事象を基にした技

白井さんが紙でダイヤモンドを切れるように魔術以外の物なら何でも切れる

界理が自分で規制した危険な技Best3の内の1つ
3ストック

『圧縮空間振動砲』

その名の通り空間を圧縮して衝撃を加え相手に打撃を与える技
イメージは削板さんの「すごいパンチ」です
1ストック

『空間転移』

界理オリジナルの『レポート空間移動』

一回で約1kmも移動できる優れもの
3ストック

とある界理の油断大敵（後書き）

ここまで見て行ってくださりありがとうございます

あの声の主はもちろんあの方です

技の方はまだまだ増えていきます（て言つか考えています）

次回で決着はつくのかな？

できれば感想をいただけたらとっても喜びます

とある界理の絶命途中（前書き）

なんだかこのごろ妄想が難しくなってきました
いい方法は無いですか？

そんな事よりぐだぐだな展開になってきましたが読んでいって下さ
い

とある界理の絶命途中

ティア side

「^{かいり}界理！」

そう言い界理の許まで走りよった
その体の胸の辺りから突き出ている透明な金属に紅い血がついていた
そこでオレイカルコスが私の方を向き

「あれ、何でお譲ちゃんがここにいてるのかな？」

「・・・して」

「はい？」

「どうして界理をこんな風にしたの！」

「おー怖い怖い。それにどうしてって言われてもね、その子も仕事
だったからだよ。そうだったこの子は自分の私情でも動いてたね」

それより、とオレイカルコスはさっきまでとは違い脅すような低い
声で

「どうやってあそこから抜け出せた。あそこには強力な結界で隔離^{かくり}
していたはずだぞ」

一瞬ティアはオレイカルコスの言葉に怯んだものの

「そんな事は君には関係ない！」

「まあ確かに俺には関係ない。けど、お前が何故ここにいるという
事には関係がある」

そう言いどこからかオリハルコンの十字架を出現させた

「足の1、2本くらいいいよな」

そんな無情な宣告をされてもティアは眉1つ動かさなかった
なぜならばオレイカルコスに殺されたと思っていた自分の恩人が自
分の目の前に立っているのだから

「おい、オレイカルコス。言ったよな『俺の私物に手えだすな。出
したらすぐに殺す』ってよ」

その言葉に反応して名前を呼んだ

「界理！」

ティア side end

界理 side

「おい、オレイカルコス。言ったよな『俺の私物に手えだすな。出
したらすぐに殺す』ってよ」

ティアが俺の事を心配していた様子で名前を呼んだ

「界理！」

はつきり聞こえてはいるが今にも泣き出しそうだった

「ティア！」

「な、何」

「離れてろ」

「うん」

その言葉を聞きティアは界理から離れた

だがオレイカルコスはその時間すら待たずに先手を打ってきた

「死ね」

十字架を界理の顔めがけて投げてきた

だが界理はあせりもせず迫ってきた十字架を片手で止めた

「化物は一回じゃあ死なねえって聞いたけど本当だったんだな」

今度は自分から殴りに来た

「本当に一回だけだと思っか」

そう言い持っていた十字架がボキッという音と共に二つに折れた

「！！」

「第二ラウンド開始だ」

本当の化物の戦いが始まった

界理 side continue

とある界理の絶命途中（後書き）

次くらいで戦闘は終わるかな？

感想も待っています

とある界理の不明能力（前書き）

バトルはなかなか難しいです

とある界理の不明能力

界理 side

「第二ラウンド開始だ」

そう言い拳を作りオレイカルコスめがけて殴った
その拳を避けようともせずただ構えていたオレイカルコスだった
気づいたら道路からそれでビルに突っ込んでいた

（何が起きた）

自分が何をされたか解らなかった

「おいおい、そんなに驚くなよ」

「ただ油断していただけだ。心配するな今から潰す」

さっきまではそこまで威力はなかったはずだった
なのにただ殴っただけで2、3mは飛んでいた

（何かが違う）

己の中の本能がそう叫んでいた

「もう終わりにしようぜ」

近づいてくる界理^{かいり}はさながらオレイカルコスの死神に見えた
その態度にむかつき十字架を出現さして界理の頭に叩き落した

きれいに入った

しかしふらつきもせずただ食らった状態から

「お前は殺す。泣いて謝ろうが殺す。これはただの俺からの私刑だ」しけい

死刑宣告されてもただ聞いているだけだった

体は動けるのに心が動こうとしなかった

手を刀のようにしてこちらにむけていた

その時暗かった辺りが月明かりに照らされた

「！！」

いきなりオレイカルコスがこちらの攻撃を避けて距離をとった

「まさかこんな所にいるとわな」

「何の話だ」

「その髪、『天道式』てんどうしきの髪だろ」

「てめえどこでそれを！」

「俺はなんて幸運なんだろうか。神は俺の事を見逃していなかった」

空に向かって叫んでいたオレイカルコスが元のふざけた口調で

「今回はここまでしておくよ。じゃあバイバイ」

「ふざけんなてめえ、このままのこのこ帰すとおもっ・・・」

「界理！」

今まで口を出さなかったティアが割り込んできた

「もついい、だからもうやめて」

「ちっ」

小さく舌打ちをした

その時にはオレイカルコス^{レイカルコス}の姿は見えなくなっていた

――――

オレイカルコスは『^{ティア・ビーナス}女神の涙』の捕獲の仕事を放棄して学園都市を去っていた

その顔には先ほどまでの痛みに耐えていた顔ではなく探していた物が見つかった時の子供のような喜びの顔だった

「まさかこんな所にいたとはね」

界理の髪の色にその能力の一部はまさに我々が探し求めていた物だった

『^{ティア・ビーナス}女神の涙』でさえ霞^{かす}んで見えてしまうような存在だった

「本当に神様は僕たちの事を見守っていた」

この事は界理たちにはまだ知られない

――――

すでに髪の色は元に戻っていた

念のためティアに怪我は無いか聞いてみた

「大丈夫か、ティア？」

「あ、うん大丈夫だよ私は。それより界理の方こそ大丈夫なの？」

その質問には答える気が無かったので無視した

今は目の前にある惨状に気を配っていたが、面倒くさいのでほっといた

「帰るぞティア」

「えっ」

「さっさとしろ、人が来る」

「でも私・・・もう界理に迷惑かけられないよ」

「いいじゃねえか、迷惑くらい」

その言葉に一瞬顔を上げたがまた下を向いた

「ああもう、バカ女、お前はこの学園都市に無断で侵入してたろ。俺にはそいつを監視する義務があんだよ」

「え、じゃあ」

「お前は俺の監視下に置く。お前に拒否権はねえ」

それには反論ができなかったようすのティア
結局、納得はしたみたいだった

「家に帰んぞ」

そう声をかけ歩いて帰った

『空間転移』を使ってもよかったが2人で歩いて帰ってたかった
俺の後ろでひょこひょこついてきたティアが

「ありがとう、界理」

そう言ってきた時の俺に向けてきたティアの笑顔はつい可愛いと思
ってしまった

界理
s
i
d
e

e
n
d

とある界理の不明能力（後書き）

今回で一応終わらせました

名前が出てきた天道 式とはいったい・・・

次は中途半端に終わったオレイカルコスの紹介でもします

感想をすんごく待っています!!

オリキャラ紹介3（前書き）

今回は僕の休憩も含めての紹介です

オレイカルコスの紹介だけです

オリキャラ紹介3

名前 オレイカルコス

年齢 27♂

身長 192cm

好きな物 アメリカンコーヒー

容姿 髪は濁ったような白色

無造作に伸ばして後ろでくくっている

かなりチャライ感じ

少し細いが筋肉はある

服装 赤と黒の神父が着るような服

性格 傍若無人
ぼうじゃくぶじん

冷血
れいけつ

戦闘狂
せんとうきやう

上からの命令には忠実

所属 ローマ正教の魔術師

魔法名 C r u x 4 5 9 (この十字架に己の信念を)

魔術 オレイカルロス(オリハルコン)を錬成、創造する魔術

オレイカルコスで作った十字架を使って戦う

オリキャラ紹介3（後書き）

つまらなかったと思いますが今日はこれだけです
次の話は空虚のお話になります

また日曜日を待っていてください

感想もお願いします

とある空虚の約束後日（前書き）

時間軸はかなり戻り prologue の日の夜まで戻ります
読み辛いと思いますがご了承ください

空虚さんのお話ですがほとんどの語り部は満くんです

とある空虚の約束後日

空虚 side

「あそこの和食のお店けっこうおいしかったね」

「ホント久しぶりに外で食べたお店でおいしかったわ」

久しぶりの姉弟でのデートを楽しんだ

満は始終空虚の手を繋いでいた

いや、繋げさせられていた

だがそんな事を嫌な顔せずむしろ喜んでいた

「ねえ満、もう帰る？ 私眠たくなっただけ」

「そうだね。明日は休みだし帰ろうか空虚姉」

2人は行きは電車で来たが今はバスも電車も終わっている時間帯だったため仕方なく歩いて帰ることにした

歩いて帰ると1時間くらいかかるが気にしていなかった
むしろ話せる時間がそんなにあるのかと喜びがあった

満 side

そうこうして30分くらい歩いたところに異変が出てきた

「ふぁー、満もう眠たい・・・」

空虚姉が眠いと言ってきた

「空虚姉もう少しで大通りに出るから我慢して」

「すう……」

「つてもう寝てる！」

不運な事にもう少しでタクシーを拾う事ができたのだがその前に姉が寝てしまった

仕方が無いので背中に背負って歩く事にした

「あれ、以外に空虚姉軽いや」

そんな小さな発見をしていた時、ふと昔の事を思い出した

いつぶりだろ、空虚姉をおんぶしたのは

昔の事を思い出しながらいつの間にか大通りに出ていた
少し辺りを見渡しタクシーが来るのを待っていた
すると運よく1台のタクシーがむかつて来た

「おっラッキー。空虚姉、タクシー来たよ」

「うんっ……すう……」

「はー、起きないか。まあ空虚姉が夜遅くまで起きてたのは見た事
ないけど」

空虚を介抱しながらタクシーを止めるため右手を上げた
黄色いデザインのタクシーは暗い夜には目立っていた
その中に入り背中から空虚を降ろした
運転手さんに行き先を告げて走ってもらった

「もしかして君の横で寝ている女の人って君の彼女かい？」

「は、はい？」

姉の寝顔を眺めていたらふいに運転手さんが話を振ってきたので声が裏返って返事をしてしまった

その返事が面白かったのか

はははと、笑っていた

少し恥ずかしかったが話を返さないのも悪いので

「いいえ、一応姉です」

「ほうお姉さんか。美人なお姉さんを持ってうれしいだろ」

「まあ否定はしませんが・・・」

そんな他愛も無い会話をした

姉を背負い自分の家の前までがんばった

やっぱり軽くても今日のデートの疲れでしんどいです

「空虚姉、もう着いたから起きて」

「うーん・・・満」

まだ少し寝ぼけていたが起きてくれた

「・・・もう少し寝かせて」

そしたらいきなり抱きついてきた

まだ玄関入ったとこなのに

「わっ、空虚姉抱きつかないで。もたないよ」

僕の理性が

確かに理性は強い方だ

だが寝ぼけている美人な姉がいきなり抱きついてきたら誰だって襲ってしまつかもしれない

「ちょっ、何かやわらかい物がおなかに当たっているから」

プニプニしていて気持ちが・・・って何考えてるんだ僕は！

いやらしい考えを捨てないと
ぼんのうめっきやく
煩惱滅却、煩惱滅却・・・

「うーん満・・・そんな所触らないでよ・・・」

「ぐはっ」

不意をつかれた必殺技が効いた

まさか姉の夢であんな事やこんな事を僕がしているなんて・・・

家に入ったのが10時くらいだった

それから寝ぼけた姉との玄関での戦いは30分は格闘していた

満&空虚 side continue

とある空虚の約束後日（後書き）

満くんの葛藤はどうでしたか？

それと空虚さんの髪型はポニーテールにしました
そっちの方が似合うと思って変えました

それと噂の第5位『食蜂 操祈』さん
ついに本編に出ましたね

一応僕の小説の方も名前を入れておきました

食蜂さん可愛いですね

とある空虚の義姉驚愕（前書き）

今回はだらだら姉と弟の日常です
たぶんラブコメです

ではどうぞ

とある空虚の義姉驚愕

満side

「ふぁーあ」

何やら体が重く感じたので目が覚めた

目を凝らして自分の体の上にあるものを見てみた

案の定、姉がいた

しかも寝ぼけながら着替えていたのか上は昨日と同じ肩を露出して
いた物を着ていたが下は穿いていなかった

正確にはパンツは穿いていた

足首の方にデニムのショートパンツが引っかかっていた

「って何で空虚姉くつきょねえが僕の部屋で寝てるの!!」

朝一からご近所様に迷惑めいわくをかけたがそんな事はどうでもいい

どうしてもものすごい格好で姉がこんな所で寝ているかの方が重大だ
った

そんな大声を発したのだから当然姉が起きた

「あれ・・・あんで満みちるがここに・・・」

寝ぼけて少し言葉を間違えたところがまた可愛い!

「ってちがう!空虚姉が僕の部屋にいてるの!」

「そうなんだ・・・すう……」

「寝ない!」

寝ようとした姉の体をゆすって起こそうとした
だが完全に寝入ってしまったて起きる気配が無い
あきらめて起きる事にした

「よっ・・・あれ？」

体が起き上がらなかった

よく見たら姉が僕の腰周りに抱きつきながら寝ていた
ある意味この格好で寝ている姉を尊敬さえしてしまいそうだ

それより年頃の男の子の部屋にそんな危ない格好でよく入ってこれ
るよね（・・・；）
ていうか僕もよく我慢してきたね

そんな姉のいる思春期真っ盛りの男の子達のもどかしさを感じつつ
姉を剥がした

下の方が寒そう（ついでに僕の理性のために）布団をかけておいた

「お休み」

そう言い姉の髪の毛を撫でながらベッドを降りた

満side end

空虚side

朝7時30分

何故か満の部屋にいた

それに関してはいつも通りなのでそれほど驚かなかった

「ハー、起きよう」

お腹も空いているのでベッドの上から起きた
布団から抜け出した時に驚いた

なんでパンツ（ズボンです）穿いてないの！！

今の自分の姿を見て動揺した

もしかして満が私の事を襲ったとか服を脱がしたとか

「まあいつか」

あまりにもあつさり自分の貞操ていそうの事を考えるのをやめた
別に満になら襲われても笑ってゆるせ———ない
ちゃんと面と向かってしたいからそれはそれで怒る
そんなちよつとずれた事を考えながら起き上がった

自分の部屋に戻り着替えた

服とかは能力で汚れないけど気分的に着替える

それから少しして部屋を出た

ふと満に対していたずら心が芽生えた

そつと近づいて驚かしてやろう

私の能力は学園都市1いたずらしやすい能力だと自負している（あまり意味無いけど）

その能力を使って音を立てずにリビングまで歩いて行って
満はソファでテレビを見ていた
満の左隣に座り顔を眺めたら

「わっ！」

「きゃあっ！！！」

満がいきなり私の方を向き逆に驚かしてきた
びつくりした私は後ろにこけそうになった
その時満に右手をつかまれ彼の方に抱き寄せられた

「びつくりした空虚姉？」

その言葉を聞き少しムツときた
けど今は彼に抱きかかえられているため「まあいいか」なんて思う
自分がいたりして

空虚side continue

とある空虚の義姉驚愕（後書き）

もうちよつと姉の主張を強くした方がいいですかね？

空虚さんに関してのご意見感想を心より待っています

とある空虚の不穏な影（前書き）

今回は・・・です

では本編をどうぞ！

とある空虚の不穏な影

空虚 side

朝につい魔が指して満を驚かそうとしたが逆に返り討ち
今は満の腕で抱かれている形

何だか結果オーライ（＾＾）v

「あ、空虚姉朝くつきよねえご飯作っておいたよ」
「うん、うん」

そう言い彼の腕から降りた

ちよつと残念（；；、）

それでも満の作った朝ご飯を無駄にするのも悪いのでテーブルに向
かった

いつもは私が作っていたのだが昨日久しぶりの満とのデートで疲れ
て起きれなかった

だから今日は満が作ってくれたご飯はうれしかった

「いただきます」

ちよつと声が上ずったが気にしない

その様子を見ていた満はこっちに顔を向けて笑っていた

朝ご飯を済ませ少しの間ソファーに座ってテレビを見ていたが満の

「ねえ空虚姉、今日はどこに行きたい？」

と言つ一言で出かける事にした

今日は満の夏物の服を買いに行っていた

育ち盛りの満はすぐに服が小さくなるため困っている

だが姉である私はその事がうれしくてたまらなかったりする

今は私の両手にある白色と青色の半Ｔシャツのどちらが満に似合うか合わしていた

「うーん、夏って言ったら青なんだけどな・・・」

と大好きな弟のために一生懸命考えている

これも姉としての私の楽しみ

けどやっぱり最後は本人しだいなので満にたずねた

「ねえ満、この白色のと青色のどっちがいい？」

「僕はこっちの白かな」

「わかった、じゃあお会計済ましてくるからちよつと待っててね」

「あ、いいよ。僕が出すから」

「いいわよ別に、少しくらい姉に甘えなさい」

「けど僕の服だから僕が・・・」

と一向に治まる気配が無かった

5分後

満が折れた

「その代わりお昼は僕が払う」

と、交換条件を出された

そして今はレストランでお昼をとっていた

私はパスタを満はリゾットを食べていた

「ねえこの後どうするの？」

リゾットが熱いのかフーフーッと息を吹きかけながら尋ねてきた
こっちはフォークでカルボナーラを巻いていた

「私はこの辺ぶらぶら散歩でも良いけど」

「じゃあそうしょうか」

返事をしながらもまだ息を吹きかけていた満が可愛くて

「はい、アーン」

ってしてしまった

その私の動きに一瞬驚いたものの

「じゃ、じゃあアーン」

少し照れながらもちゃんと食べてくれた

その反応も可愛かった

こんな事を考えている私はつくづくブラコンだなんて思う
だけどそんな姉と一緒にいる満もシスコンだ
だから私たちは相性がいいのかもしれない

「そろそろこのお店でしょうか」

「そうだね。じゃあお会計済ますよ」

「うん、お願い」

そう言い席を立ったときふと窓の外を見たら白衣を着た人が通って
いったのが見えた

珍しいなと、思ったが気にしなかった

だが空虚は気づかなかった

その白衣の男がこつちを見て笑っていたのを

空虚 side continue

とある空虚の不穏な影（後書き）

今回はふせんらしき物を1つ入れてみました

この白衣の男はいたい・・・

空虚さんたちの日常に異変が

ってどうですかこんな後書きも。

それと、天道さんが強く設定しすぎたため少し変更

感想も待っています。

とある空虚の過去友人（前書き）

いつもどおりがんばってみました

ではどうぞ

とある空虚の過去友人

空虚 side

「遅い・・・」

今私は公園のベンチに1人で座っている

なぜ1人かと言うと満がみちるトイレに行ったためである

だが行ってから30分は経っている

私が1人のためにナンパをしてくるチャライ男の相手もめんどくさ
くなつた

仕方が無いので電話をかけてみた

p r r r r r p r r r r r p r r r r r

出ない

いつもなら2コールまでに出ているのに

不安を胸に抱いて満が最後に向かったトイレまで走っていった

トイレの前まで来た

まだ中にいる事を願い姿を見えなくして入った

案の定トイレには誰一人としていなかった

不安が確信して急いで満を探すため外に出た

「つて、うわー!」

勢いよくトイレから女の子が出てきた所を人に見られたが気にしな

「つて、満！！」

「あれ空虚姉くつきよねえ、何でここに？」

そこにいたのは私の大事な弟だった

「もう、今までどこにいたのよ！」

「ごめん空虚姉、ちよつと道案内させられててね」

「まあいいわ、無事だったんだから」

だが満の顔を見ても不安の色は消えなかった

「ほら行くわよ」

「どこに行くの？」

「そんなの決まってるじゃない・・・」

一拍を置いて答えた

「——きりたに斬谷の研究所」

そう答えた瞬間満の顔がぼやけ別の顔が見えた

空虚の一言が男の演算を鈍らせた

どうやらこの男の能力は光の屈折を利用する能力者らしい

ぼやけが徐々に体足まで進んで行った時その男の顔が満より若かった
その首には声を変える装置らしい物がつけられていた

「あちゃー、もうばれちゃった。どうしてわかったの？」

「満は空虚姉くつきよねえ（くつきよねえ）って呼んでるのにあんたは空虚姉（

くうきよねえ」だったからよ」

「へーさすがだね空虚姉」

「おまえにその名前で呼ばれる筋合いは無い」

「あるよ。だって俺たちは」

「もしかして・・・矢如^{やじこ} 光輝^{こうき}？」

「そう、『能力上昇計画』の生き残りの矢如 光輝」

『能力上昇計画』

それは置き去りを使った非人道的な計画

その実験には空虚たちのいた施設の子供たちが使われた

「何で今頃になって私たちを狙うの？」

「さー、あの人考えも趣味も異常だからね。だって10歳も下の子の事がいまだに好きだなんて笑えちゃうよ」

「どうして斬谷の下で働いてるの。あいつのせいで私たちの居場所がめっちゃくちゃにされたのに」

ほんの少しの怒気がこもった言葉をつむぎだして矢如を諭すように話した

だがあつちの反応は薄かった

まるで斬谷に洗脳されたかのように

「確かに斬谷^{あいつ}のせいで俺たちの居場所は無くなったけど、」

「けど？」

「けどあいつのおかげで能力が上がった！それで最初にした事って何だと思う？」

昔の事を思い出すように遠くを見つめていた
その表情は見つかっていないいたずらをした時のようだった

「俺の事を馬鹿にしたやつらをこの手で殺した！」

「！！！」

「こう心臓にナイフを差した時とかさ快感だったよ」

そう言いポケットに手を入れた

「例えばさ、こんな風に！」

ポケットから一瞬銀色に輝くナイフが見えた時には矢如は見えなかった

次の瞬間にはすでに彼が目の前に立っていた
私のお腹にナイフが刺さりながら

空虚 side continue

とある空虚の過去友人（後書き）

そろそろ事件に首を突っ込む人が出てくるかもしれません

誰とは言いませんが

予定です。

とある空虚の敵地目前（前書き）

何故か空虚さんのお話なのに・・・

駄文（過去最低の）ですが読んでください

ではどうぞ

とある空虚の敵地目前

空虚 side

「斬谷きりたにからはあんたを殺しても良いって言われてたんだよな」

いつの間にか矢如は私の前に立っていた

その手にはナイフが握られ刃は私の体に刺さっていて見えなかった
だが刺さっているのにもかかわらず空虚くうきょは苦痛の色を見せずにナイフを持っている方の手を掴もうとした

矢如は危険だとすぐさま反応してナイフを離し距離をとった
カランカランと、離れたとたん今までナイフが体に刺さっていなかった
たと言つように地面に落ちた

「不思議そうな顔するんだ」

「まあね level 5の力は初めて見た、けどここで心が折られ
たら暗部じゃお仕舞いさ」

今度は腰の方に両手を伸ばしましたナイフを2本取り出しながら

「こつちもあいつからのお叱りは嫌だからね。さつさと終わらすよ」

そしてさつきと同じように見えなくなつた

「私もあんたなんか相手にしている暇なんかないの」

お互いの心のうちを明かした
その戦いはすぐさま決着がついた

「いってえ」

池の中央に浮かんでいる一人の男がいた
その男の頬には赤く殴られた後が目立っていた
さつきまで持っていたナイフは池に落として服はびしょ濡れだった
その服の中から携帯電話を出してある所に掛けた
念のため防水にしているよかったです

p r r r r r p r r r r ピッ

『ハイこっちは斬谷』

「よお俺だ、矢如だ」

『ああお前か。何だ生きてたのかよ』

斬谷の方はこっちが死ぬだろうと思っていたらしく電話がかかってきて驚いていた

確かに力の差が歴然でしかも暗部に身を置いているにもかかわらず殺さずに生かしたのは俺自身も驚いていた
だがそんな話がしたくて電話をかけたと思われなくなかったので早々に用件を伝えた

「そんな事より空虚がそっちに行つたぞ」

『おつ、それは本当か！』

「大丈夫だこの目でちゃんと見ていた。だから成功報酬をだな・・・」

『あ、その事なんだが・・・』

何か電話の向こうでケタケタと笑い声が聞こえていた

こっちは体が痛みながら岸まで泳いでいたのであまり話の内容が耳

に入らなかった

岸に上がりもう一度斬谷に聞き返した

内容的には報酬の減額だろうと思っていた

ここで空虚を連れて戻れなかったためだ

だがこっちの予想とは全然違う答えが返ってきた

『いやー、もうお前必要ないわ』

「えっ、お前どう言う意……」

『だから、もう必要ないからそこで死んどけ』

ピッ ツーッ

向こうから一方的に切られ呆然とした

冷静に頭を働かしさっきの言葉を復唱した

だが向こうはその答えをすぐにくれた

3台の駆動鎧が目の前から現れた

光学迷彩が使われていたらしくまったく気づかなかった

その中の1台がガトリング砲をこっちに向けながら

『斬谷さんからの伝言だ』

それと同時に後ろにいた1人が書類らしき物を持ってきた

その書類は斬谷の下で働くときに書いた契約書だった

だがその契約書の中にはじめて見た文面が載っていた

《この契約は霜月 空虚に敗北又は死亡するまで有効》

その一文を見て初めから斬谷はこの仕事で俺を始末する予定だと理解した

その事実矢如は怒りを見せた

「斬谷の野郎おおおおお！！！！」

ズダダダダダダッ

と、矢如の叫びはむなくもその直後のガトリング砲の音にさえぎられた

空虚は第10学区の斬谷の研究所にいた

そこは昔何人もの置き去りが目の前で殺された場所だった
自分自身がこの実験で脱走して以来何も変わっていなかった

空虚side continue

とある空虚の敵地目前（後書き）

何だか矢如さんのお話でしたね

しかもかなり雑に・・・

次は日曜日の投稿です

感想もお願いします

とある空虚の能力不発（前書き）

かなり暑くなってきました

が、もうすぐ夏休みです

お休みです！

夏休みは気まぐれに投稿していきたいです

では本編どうぞ！

とある空虚の能力不発

空虚 side

「久しぶりにここに帰ってきたけど、何も変わってないわね」

口から出たのはそんな率直な感想だった

その変わっていないと言う感想は外見だけであって欲しいと思っている

だが、今のこの状況からはありえない推測^{すいそく}であつた

門の前まで歩み寄つた

門の前にはアサルトライフルを持った男たちが配置されていた
私の事に気づいたのか男たちが一斉に銃をこつちに向けてきた

「止まれ！今すぐここから立ち去れ。さもないと撃ち殺すぞ！」

そのうちの1人がこつちに向かって叫んできた

しかし私が止まらなないとわかつて一斉に撃つてきた

俗に言う『ボレー』

適当にあしらつてもよかったのだが事が事

念には念を

備えあれば憂いなし

殲滅^{せんめつ}する事にした

「ふー、疲れた」

大掃除をした後の一息を吐く
ものの10分で片がついた
ある者は腕が不自然な方向に折れ、ある者は首が曲がっていた
だが、その中には誰一人として死人は出ていなかった
満との約束を守っていたのだ

「先を急がなきゃ」

歩を進めた時、落ちていた無線から聞きたくないやつ声が聞こえた

『ハロー。元気にしてた？』

その男は私達がもつとも嫌う男の声だった

「きりたに斬谷お前だけは許さない」

『おーおー、可愛い声でそんな暴言どうかな？他の男子に嫌われるぞ』

「みちる満以外の男子に嫌われてもいい」

えらく問題な発言をしてしまったが気にはしなかった
今は斬谷の居場所の方が大事だ
そこに満もいるはずだから
落ちていた無線を右手に持ち門を通ろうとした
通る際に体の透けさして門を通った

『それと言い忘れてたが・・・』

無線からは申し訳なさそうに言葉を並べていた
だが斬谷の言葉はこちらをバカにしたように話している

歩いて研究所の扉の前まで来たところでようやく斬谷が続きを話した

『能力は使えないぞ』

「!？」

その言葉を理解する前に

いや、理解はできたが体が反応できず後頭部を殴られ地面に倒れたその衝撃で手元から離れた無線からは私をあざ笑うかのように

『だから言ったのによ。能力は使えないって』

ハハハ、とかるうじて残っていた意識にあいつの声が響くのが腹が立だしかった

『もう寝ちゃったのか？じゃあそいつを俺の部屋に運んで置け』

「ちく・・・しょ・・・う」

それを機に斬谷の部下が私を回収した

「よし、計画は順調、順調」

会社のお偉いさんが座るような椅子に斬谷は座っていた
デスクには空虚を使った実験の結果と数値の載ったパソコンと、自分の部屋に運ばれてくる様子を監察している液晶テレビが置いてあった

用のなくなったパソコンを閉じ、椅子から立ち上がった

斬谷は強化ガラスの向こうにいる人物を見ていた

「もうすぐお前の姉ちゃんが来るぞ、満」

向こう側には体中拘束具で固められ、頭には何かしらの装置がつけられている満がいた

満に向かって忌々しく呪詛^{じゆそ}でも吐くように名前を呼んだ

――――――――――

私はいつの間にか豪華な部屋のソファで寝かされていた
その部屋はもう二度と訪れる事はないと思っていた場所だった

「もう起きちゃったのかい、空虚^{くうそ}」

その声の主――斬谷は静かに不敵に笑っていた

空虚 side continue

とある空虚の能力不発（後書き）

感想も評価もしてくれたらうれしいです

空虚さんのお話も後2、3話です

それではまた

とある空虚の部屋監禁（前書き）

そう言えばこのごろ紅蓮さんが出てないような……

とある空虚の部屋監禁

空虚 side

「久しぶりに見たけど、きれいになったな空虚^{くうきょ}」

「あんたに言われてもうれしくないって言っただろ」

ゆつくりと私の体を下から上に見ていた

虫唾^{むしず}が走った

今すぐこいつを殺したい

そう思ってもさつきから頭がずきずきと痛む

そんな朦朧^{もうちゅう}とした意識で演算をした

だがいくら演算をしても能力が発動しなかった

「空虚、無駄な事はするな。お前は今はただの高校生のようなものだ」

斬谷^{きりたに}が椅子から立ち上がり私の方に近づいてきた

無理をして立とうとしたが頭痛がひどくなりできなかった

私に触れる事ができるところまで近づいてきた

そしたらおもむろに私の事を抱き上げてきた

「お前はもう俺のものだ。誰にも渡さない」

「離せっ！」

必死に抵抗してみるがやはり頭痛で動けなかった

なかなかじつとしない私を斬谷はソファーに押し倒した

手首を片手で掴まれ顔を近づけてきた

「や、やめて……」

「おっ、その顔いいね」

キスをしようとしているのは分かった

だがこっちは体に力が入らなかった

バンツ、と音がしてドアが開いた

開いた本人は急いで来たのか肩で息をしていた

「ほ、報告します！霜月 満のデータがすべて取り終わりました！」

「よし分かったご苦労。じゃあ死ね」

いきなり腰から銃を抜き出しその研究員の頭を撃った

部屋の中に硝煙の臭いが充満した

斬谷は何事もなかったかのように腰に銃を戻した

「ちっ、このアホ。邪魔すんなって言ったのによ！」

その人間だった物を執拗に蹴った

自分の邪魔をしたために

「ハアー、じゃあそこから見とけ」

蹴り飽きたのか最後に頭を潰してから部屋を出た

ガチャツと、ドアの向こうから鍵を閉められた

部屋を見渡したらガラスが張られたところを見つけた

無理をしてその場所まで行った

ガラスの向こうでは誰か機械に繋がれた人がいた

『空虚！こいつが誰だかわかるか？』

唐突に部屋のどこからか斬谷の声が聞こえた
痛い頭を動かしてその機械に繋がれている人を見た
その人物は私の良く見知った顔だった

「満！！」

『やっと気づいたか。じゃあそろそろ始めるか』

「斬谷！満に何をするの！」

『決まってるだろそんな事』

てきばきと部下に指示を与えていった
それにひと段落をした

その言葉は私の嫌な予想通りだった

『満を殺すんだよ』

目の前が真っ暗になる
と言う表現を初めて実感した
そのくらいその言葉は現実味があるからだ
一度言った言葉は何が何でも実行する
それがこの斬谷 夜継と言う男だった

「や…やめて……」

『はは、やーめない』あ、その取って』

それはリモコンのような装置だった
それが何をする物なのかを理解した

「スイッチ オン」

斬谷による死刑宣告よりボタンが押された

空虚side continue

とある空虚の部屋監禁（後書き）

空虚さん編の後何を書こうか考え中です

1 界理の日常

2 空虚の後日談

3 紅蓮からの界理に介入

意見感想お待ちしております

とある空虚の停電騒動（前書き）

そろそろ終盤になってきました

空虚さんの活躍をどうぞ！

とある空虚の停電騒動

空虚 side

斬谷はそのボタンを押した

それで満は死ぬはずだった

だがそうなる前に突如として研究所が停電した

その事が理解できたと同時に私の頭痛は止まった

「待つて満」

壁に手を置いてそのまま通り抜けた

そのまま重力に従い3階ほどの高さから怪我なく着地した

着地点は斬谷の目の前

すぐに殺せるように

だが当の本人はまったく焦りもしなかった

「駄目だろ勝手に部屋から出たら」

「満を返してもらっ」

そう言い両手を斬谷に向けたがまた顔の表情を変えずに

「ねえ空虚、俺に勝てると思ってる？」

「それはこっちのセリフ」

両手を横に屈いだ

それだけで凄まじい衝撃波が起こされた

空虚の『現実逃避』^{クリアランス}は触れている物体を透けさせる能力
今の衝撃波は触れた空気を透けさして真空状態にして衝撃波を起こした

斬谷はこれを体を低くして避けた

だが周りの研究員は反応できずに吹き飛ばされた

「へー、昔より随分力の使い方が上手くなったんじゃない」
「減らず口を言っな！」

今度は床に手を置き床を透けさした
それで斬谷を地面に埋めようとした

だがいくら演算をしても何も起きなかった
体制を整えた斬谷はいつの間にかグローブをはめた手で私の体を押し倒した

なぜこいつが私の体に触れるのかその事で動揺していた
さっきの停電ですべての電子機器は使えなくなっていたはずなのに

「驚いているのか」
「くっ、触るな！」
「その顔もまた良いな。どうやって触れているか教えてやる」

おもむろに斬谷は私の体に触れてきた
両手は左手で掴まれていて動かなかった
不可解なのは触れている斬谷自身にも能力が使えない事だった

「お前の常時発動している『透過』はある物に対してはまったく意味がない」
「ある物って？」

「AIM拡散力場や能力に直接作用する能力だ。これはお前の動向を調べている時に仮定したものだ」

斬谷の手は徐々に私の胸の方に動かされ愛おしいものを撫でる時のように胸を撫でられた

「ぐっつ……」

「ふっつ、いい顔するなあ。そして今このグローブとあのでかい装置でその仮定を証明した！」

くっ、下種な童貞にファーストタッチを奪われてしまいました！
じゃなくて

この状況を打破するような策を考えなきゃ
だがそんな試行錯誤しこうくわくも虚しく頭にあの頭痛がよみがえった

「ははっ、やっと予備電源が稼働したか♪これでお仕舞いだ空虚♪」

「くっ、きり…たに……」

「ははは、頭が痛すぎて何も考えられないかな」

斬谷以外の研究員は何か重要な仕事におわれていた

よく見ると満の周りで作業が行われていた

さっきよりこの頭痛が強いため装置の出力が高くなっているのがわかった

たぶん私をここから動かさないようにするためだ

「そろそろ幕引きだ」

私の体の上から移動した

だが私の体からはまだ重い何かがあるように動けなかった

「そうだな、最後にこの装置についても教えておいてやる。これはお前の弟の能力『^{AIM}能力停止』を基にして作った装置だ。だから対象にできるのは1人だけだな。これ作るのに数年かかったしな」

その顔は自分の大切な物を他人に自慢する時のように楽しそうだった周りにいた研究員に何か指示を出していた
ついに終わらそうとしていた

それがわかつているのに止める事ができない自分に腹が立った
仰向けに寝転んでいる私は満の顔がよく見えた
その彼の口が少し動いた

『能力を使えるようにする』

まず彼の意識があつたことに驚いた
だがそんな些細な事は今はどうでもいい
今は一刻も争う事態のため
そして次の瞬間私の頭痛が治まった

空虚 side continue

とある空虚の停電騒動（後書き）

斬谷さんは空虚さんを手に入れるため2つの装置を作りました
満を使つて作ったあの装置

もう1つは斬谷さんのグローブです

後々詳しく説明すると思います

キャラ紹介のときに

とある空虚の義弟救出（前書き）

今日は祝日なので投稿しました

少し長めです

空虚さんの活躍をご覧ください！

とある空虚の義弟救出

空虚 side

満みづるのおかげで頭痛がなくなり動けるようになった
まだ斬谷きりたには私が動けるようになったとは知らない
素早く体を起こし勢いよく斬谷の顔めがけて裏拳を放った
前触れもなく不意をついたためもろに食らった

「ぐ」あ
」

そのまま斬谷の重力を透けさして30m先の壁まで飛ばした
ついでに持っていた満を殺すための装置を壊した
残っていた研究員も同じく壁まで殴って飛ばした

「満！」

「くう……きよねえ……」

「待つてて今すぐここから出してあげるから」

そうしてわけのわからない機械に触れて満から引き剥がし遠くに投げ捨てた

自由の身になった満を私は抱き寄せた

「もう大丈夫だからね満……」

「ありがとう空虚姉」

2人してお互いを抱き合った
しばらくの安堵あんどだったがまだ事が済んだ訳ではない

「あー畜生、もう少しだったつてのによ」

強めに壁にぶつけたはずなのにもう起き上がってきた
起き上がる時に私たちの事を一瞥した

「お熱い姉弟物語ですかつての。あの装置が作動してるのに動ける
つてのはどういう意味だ」

「そんなの満のおかげよ」

「そうかい、じゃあもう良いわ。お前は殺してホルマリン漬けにで
もして部屋に飾っておいてやる」

そう言い手にはめていたグローブをきつちりとはめなおした
あいつからは異様な雰囲気が漂ってきた

それは私たちに對する殺氣だった

斬谷がこつちに来ようとした時謎の爆発が起きた

「何だ、この爆発は？」

「斬谷さん、今の爆発ですべての予備電源が破壊されました！」

「そんなもんでもいい邪魔だ！」

そのまま部下を銃で殺した

今の斬谷は私たちを殺す事に執着している

それほどあいつの心理状態は悪いと見た

「満、今の内に逃げて」

「それじゃあ空虚姉はどうするの？」

「私は斬谷をどうにかするから」

今の戦況はこつちに傾いている

勝算はあったが満の事だ私と一緒に逃げようと言い出すのはわかっ

ていた

だから何かを言う前にこの場から退場させた
無理矢理壁の向こう側に逃げさせた

「く、空虚姉!？」

「大丈夫。また後で会えるから」

そうやって満をここから抜け出させた

今この部屋にいるのは私と斬谷だけになった

「空虚、お前を殺した後あのガキも殺す」

「私はあんたに殺される気なんて無い」

こつちの能力の弱点は斬谷は知っている
だけど相手は能力も何も無い普通の大人
確実にこつちの不利ではない
そこを突いてこの騒動を終わらす

「はっ!」

足元に落ちていた金属片を投げた

それと同時に空気を透けさして衝撃波を起こした

衝撃波は先に投げた金属片に当たりばらばらに散らばった

それが一斉に斬谷の方に飛んでいった

「ちったあは頭使ったんじゃないの」

少しも焦らず部屋中にある机や機械の下に隠れて事をしのいだ
それと隠れたれた事により斬谷を見失った
すぐにさっきまでいた場所まで行ったがいなかった

「こっちだ」

いつの間にか私の後ろにまわりこんでいた斬谷は拳を握りボディ―ブローを入れた

後ろからの不意打ちで対処できずに入り汚い床の上を転がった
肺の中の空気がすべて吐き出され息がでなくなった

斬谷は追撃を入れようと拳を握っていた

とつさに自分の重力を透けさし床を蹴り真横に逃げた
そのまま床の上にあった色々な金属片や機械を横に移動しながら投げた

「少しは手加減しろよ。こっちはただの研究員だつてのによ」

だがその攻撃もぎりぎりになりながらも避けていった

「ただの研究員がそんなに動けるわけが無いでしょ」
「確かにな」

私も斬谷も余裕が無く肩で息をしている

そろそろ決着をつけなくかつたら私の方が不利になる

さつきまで稼働していた装置で体力が削られていたからだ
早急に事を終わらす方法考えていたらそれはすぐに見つかった

「もうお仕舞いにするか？」

「あんたが地面にはいつくばってくれるんならね」

その決定打を掴んだ

それと走ってきた斬谷にもう一度腹に重い一撃を食らわされた

「ぐはっ!!」

私はそこで斬谷に殴られ意識を失った

斬谷は私を殴って意識を失った

意識を失う前ぼやけた視界に見慣れたコートを着た人物が立っていた

空虚side continue

とある空虚の義弟救出（後書き）

やっとの思いで出せました

久しぶりの本編登場です！

それではこれで……

とある空虚の病室起床（前書き）

今回で終わると思ったら大間違いです！

て言つか作者が終わらし切れなかっただけです

ちよつとチヨーシに乘りましたm（――）m

とある空虚の病室起床

空虚 side

目が覚めたらそこは真っ白な部屋だった

ここが病院である事がわかった

真っ白なベッドの端で倒れ掛かるように眠る満みちるがいた

彼の腕には真新しい包帯が巻かれていた

その事に胸が痛み知らず知らずのうちに彼の頭を撫でていた

「あれ、空虚姉くうきよねえ起きたの」

撫でていたら起きてしまったらしい

起きてしまったが撫でる手を止めなかった

しばらく撫で続けていたら照れてきたのかベッドから離れようとした
そのため逃げようとした満の首元に手をまわしてこっちに抱き寄せた
必然的に彼の顔は私の胸に飛び込む形になった

154

「って、空虚姉どうしたの？」

「よかった、満が無事で……」

私の胸の中では顔を赤くしていた

その彼の姿がいとおしくなりまた強く抱きしめた

私の許から抜け出そうともがいていたが諦めたらしく抵抗をやめた
そこで私は話を続けた

「もし満があいつに殺されていたら私、生きていけなかった」

「大丈夫だよ空虚姉は。だって僕より強いんだから。それに今こう
して生きてるんだから」

「もう…私の前からいなくならないで…」

それは私がこの事件で改めてわかった
満が私の前からいなくなってしまうたら生きていけなくなる
それほど彼に依存してしまっている

「僕は空虚姉の前からは絶対にいなくなったりしないよ。だって、
たった一人の家族だから」
「ありがとう満」

言い終わって今度は満の方から抱きしめてくれた
そのぬくもりは今までの不安を一気に和らげてくれた
いつの間にか私たちはお互いの事を見つめ合っていた
そのまま満の頬に両手を添えた

「僕はずっと空虚姉の事を大切な家族だと思っている」
「私もたった一人の大好きな……」

その言葉は飲み込んだ
言葉で伝えるよりも行動で示した方がいいと思った
だから私は満の顔を自分のほくに寄せた
満の顔は赤く火照^{ほて}っていたがその表情はとても優しくかった
そしてゆっくりと満の顔を近づけていつ——
がらっ

「お邪魔するよ」
「キャ——————!!——!!」
「わ——————!!——!!」

バンッ

ドンー！！

「ぐはっ！」

「み、満！」

医者は悪びれもなく

「もしかしてお邪魔だったかい？」

と言ってドアの前で私たちの様子を観察していた

5分後

いきなり病室のドアを開けられ驚いた（まあ鍵はかかっていないので開くのは開くのだが……）

とつさに満をベッドから遠ざけようと思い体を押したらつい能力を使用してしまい壁まで飛んでいった

当の医者は私たちがキスをしようとした現場を見ても1人冷静だった

後もう少しだったのにカエル顔の癖に邪魔しやがって

後で覚えてるよこのカエル

そして私は静かにこのカエル医者に怒りを募^つらせながら話を聞いていた

「その様子だと体の方には異常は無いようだね」

「ええお蔭^{おかげ}様で。それでお話^{おま}って？」

「大した話じゃない、ただどうやって君たちがこの病院まで運ばれたかを話すだけさ」

私はてっきり満が救急車を呼んだとばかり思っていた
だがこの医者の方ぶりからすると別の誰かが私たちを運んだと言う
事になる

「君たちをここに運んだのは確か『紅蓮^{くれん}』と言った人だったよ」

「へー、まさかここでそいつの名前が出るなんてね」

「その紅蓮が君たちにこれを渡しておいてくれと僕は頼まれたんだよ」

はいこれ、と私に一枚の紙が渡された

「じゃあ僕は仕事に戻るよ。それと君の退院は明日だからね」

「わかりました。ありがとうございます」

それじゃあ、と言って部屋から出て行った
残った私と満はその紅蓮からの手紙を読む事にした

『やあ、お二人さん

みんなのアイドル紅蓮さんだよー＼（＾０＾）／』

私はこの二行だけでイライラしてきた
いつそ破ろう

まだ下には色々書かれているが関係ない
そう思い手に力を入れて手紙を破ろうとした

「ちよつと待って、僕が読むから」

あつさり手紙を横から盗られた

仕方ない、後で内容を教えてもらおう

眠たかったためベッドで横になったらそのまま睡魔に負けて眠ってしまった

空虚 side continue

とある空虚の病室起床（後書き）

次で空虚さんサイドが終わります

本とおわります！

ではまた次の投稿日に

とある空虚の日常返上（前書き）

今回で空虚さんのお話はお仕舞いです

それでは本編どうぞ！

とある空虚の日常返上

空虚 side

いつの間にか私は寝ていたらしい

満みちるにいたってはどこかに行っていた

今の時間が何時なのか知りたくなった

ちょうど棚の上に私のケータイがあったので見たら12時を過ぎたころだった

それを確認したら何だかのどが渴いてきたので飲み物を買うために病室から出た

改めてこの学園都市製自販機の飲み物の種類の異常さに頭を抱えた私はこれほど普通の飲み物が飲みたいとは思った事がなかった
諦めて後で満に何か買ってきてもらおうか考えていたらその救世主は降りてきた

『ブラック無糖』

この単語は私の生涯しやうがいで語り継がれるくらいの奇跡だったろう
私は自販機に千円札を入れてボタンを押した

「あれ？」

ピッ ピッ ピッ

何回も押しても反応がなかった

よく目を凝らしてそのコーヒーのボタンを見た

『売り切れ』

その日の病院の話題は自販機の前でひざを折り床に手について絶望していた女の人だったとはその本人は知るよしもなかった

結局私は何も買わずに部屋に戻った

「わっ、びっくりしたじゃない」

「あ、お帰り空虚姉くうつきやねえ」

部屋に戻るとどこかに行って戻っていた満がパイプ椅子に座って待っていた

「自販機何にも売ってなかったから家に帰ってこっちに戻るついでにこれ買ってきたけど飲む？」

満の手にはスポーツドリンクが握られていた
私はありがたく思いカラカラだったのを潤した

「ぶはっ、アー生き返ったー。ありがと満」

「どういたしまして。そんな事よりさっきの手紙の事なんだけど…」

…」

すっかり忘れていた

今の今まで忘れてた

ぼつぎやくろくおん
忘却録音

じゃなくて！

「どんな内容だったの？」

「空虚姉は手紙読まないんだ……」

「だって……呼んだら破るもん（はあと）」

「はー、そんな可愛く言ってもねえ」

それから満は紅蓮ぐれんの手紙に書かれていた事を話してくれた

私が壊した器物の損害などの隠蔽いんぺい

斬谷はもう私たちの前に現れない事

私たちの日常生活の修復 e t c . . .

とても学生が1人でできるような内容ではなかった
だが紅蓮の事だからこれくらいの事はやりかねない

「またあいつに貸しができちゃったな」

「あの人はそんな事気にしないとと思うけど」

話し終わった頃には夕方になっていた

だが話し終わった私たちの心の内はとても明るく温かった

次の日の昼前

無事私は退院した

満は今日は学校があつたのか病院に来てくれていなかった

むー、お姉ちゃん不孝のやつめ（ー３ー）

家に帰ってきた満をいじめてやろう

そんな事を思うくらい日常が戻っていた

マンションの前まで着いた

今思えばこの暑い夏の昼間を歩いて帰ってきたなと思った

「あー、あつい。何でタクシー使わなかったんだろ」

そんな事を言いながら私は自分の部屋までがんばって歩いた

自分の部屋のドアの前によやく着いた

ドアを開けようとしたら勝手にドアが開いた

「お帰り空虚姉」

ドアを開けたのは学校に行つたと思っていた満だった

私は持っていた荷物から手を離し思いっきり満に抱きついた
彼はちよつとよろけたものの私を抱きとめてくれた

「ただいま……満」

こうしてまた２人の日常が始まった

空
虛
s
i
d
e
e
n
d

とある空虚の日常返上（後書き）

なんか最後の方はぐだぐだでしたね

作者の力ではこれで限界です

次はあの2人の紹介でもします

キャラ紹介4（前書き）

今回は結構主要だった（？）2人の紹介です

キャラ紹介4

名前 矢如やごと 光輝こうき

年齢 14♂

身長 159cm

好きな物 お金

容姿 茶髪

前髪を7：3でピンで留めている

小学校高学年が通るくらいの童顔

少し痩やせているような体

服装 自分より大きいサイズの服を着ている
ズボンのベルトのところにナイフを2、3本差している

性格 無関心

守銭奴しゆせんど

人を平気で殺す

能力名 『ライトイメージ 反光写像』

Level 3

能力
人を反射した光を自分に浴びせその反射した人物の姿になる能力

過去
空虚、満と一緒の施設の置き去りくうつきよ みだちる チャイルドエラー

『能力上昇計画』の生き残り

名前
斬谷 夜継きりたに よつぎ

年齢
27♂

身長
182?

好きな物
金、名誉、地位、霜月 空虚

容姿
若者がするような金髪
手入れが行き届いているさらさらヘア

年齢より若く見える
黙っていればかつこいい

木原 数多きはら あまた同様に鍛えていて一方通行を素手で圧倒できるアクセラレータ

ほど

服装
着くずした紺色のスーツの上から白衣を着ている

性格
独占欲が強い

嫉妬深い

傍若無人

ている

霜月 空虚を自分の物にしようと満を殺すのに躍起^{やつき}になっ

経歴

数多と一緒に一方通行の実験に付き合っていた
数多とは友達らしい

その後置き去りを使った実験を任された時に空虚と出会った

実験

『能力上昇計画』

道的な実験

置き去りを使い人工的にLevelを上げようとした非人
この実験で空虚と出会う
ほとんどの置き去りは死亡
残ったのは空虚、満を含めた6人

『無実体及び有実体の解析実験』

2人のLevel15の実験データをとろうとした実験
この実験で一方通行と空虚が戦った
その後空虚の逃走で実験が中止

製作物

AIMストッパー
『能力停止』応用型『AIMジャマー』

用した装置

満の能力を解析した上で既存のキャパシティーダウンへ転

人工能力停止

対象にできるのは1人のみ

既存のキャパシティードアウンの様に音は出るものの超音波の領域で人間には聞こえない

グローブ（名前なし）

素材に能力体結晶と学園都市の技術を用いて作った耐熱剤

『サン・プロテクト太陽の加護』を使用したグローブ

『クリアランス現実逃避』の能力自体に干渉する能力へは能力が使えない

いと言っ点に注目して作った対『霜月』

キャラ紹介4（後書き）

以外に斬谷さんってすごいです

何か色々とせこい感じがします

話は変わります

次は紅蓮さんの話かもしれません

順番的に

とある紅蓮の裏方作業（前書き）

今回から紅蓮さんの日常と非日常のお話です

ではござ

とある紅蓮の裏方作業

斬谷 side

「クソがつ、何でああなったんだよ！」

俺は汚い床を仰向けに寝転がった

この日のために数年がかりで計画したものが水の泡になった
八つ当たり気味に床をたたいた

「俺の計画は完璧だったのに。ちくしょう、何のイレギュラーだよ
！」

「そんなの僕以外ないじゃない」

不意に頭の上で声がした

その声は数年前の空虚^{くうきょ}たちが逃走した時にも聞いた事がある声だった

「お久だね、斬^{きり}谷^{たに} 夜^よ継^{じぎ}さん」

斬谷 side end

紅蓮 side

斬谷は僕の事を見るなり警戒の色を強めた
まあ無理もない

何せ僕は過去に彼の実験を1人で潰した事があったのだから

「そんな所で寝てたら風邪ひきますよ」

「何でお前がここにいる！」

「ごもつともな意見だ」

確かにここに入るには関係者以外は入れないのが研究所

そこに易々^{やすやす}と入っている僕

不思議がるのも無理はない

まあここで話をせつかく振ってくれた彼に言葉を返した

「何でつて言われても……空虚ちゃんたちが困ってたから」

「困ってたからって、この計画はどこにも報告をしていない非公式
の実験だっただぞ！」

「斬谷さん……あんたも僕が誰だかわかってるの？」

その言葉で少し黙った

悔しそうに唇をかみながら立ち上がった

空虚ちゃんの攻撃がまだ効いているのかふらふらとした足取りだった
だがその瞳は僕に対して途轍^{とてう}もない怒りをあらわにしていた

「調子に乗るなよ第0位……」

「へー、僕の事を知ってたんだ」

僕の事を知っていたのは予想外だった

何せこの事を知っているのは統括理事会、統括理事長、僕の友達数
人、そして一部の人たちだけだからだ

その事を知っている僕に刃向かうのは賞賛に値する

「いいあの装置、『^{AIM}ストッパー
能力停止』応用型『AIMジャマー』使わな
くて？」

「そんなの使わなくてもいい。こっちにはこのグローブがある」

それは空虚ちゃんの弱点であつたグローブだった
あれのどこが丈夫なのだろうか

こっちは何の構えもなく考えていたら斬谷は距離をつめてきた
つめたと同時に右フックを入れようとした

だがその前に左手で捕まえた

「そのグローブ……『サン・プロテクト太陽の加護』を使つてるの？」

「ちっ」

「太陽の表面温度でも熔けないと言われるけど……たかが6000
度だろ？」

「!？」

掴んでいた右手をひじの辺りまで消した

斬谷は何が起こったのかわからないという表情をしていた
だが明らかに痛みはあるようだ

「うぐ、お前…何をした…」

「答へとしては蒸発させただけだよ」

「蒸発だと、太陽の熱でも耐えられるのに蒸発なんて……」

「だ・か・ら、たかが6000度で僕の『ビッグバン天体碎き』を耐えられる
わけないだろ」

僕はもう終わりにしたかった

今夜は色々忙しいため

「人生の最期くらい楽に逝かしてあげようか？」

「てめえを……末代まで呪つてやる……」

「はは、お願いするよ。じゃあ、ヨロシクさん♪」

彼の肩に手を置いて終わらした
後に残ったのは何もなかった

確か人間って1000度くらいで融けてガムみたいになるって言う
けどホントかな

そう言えば今の今まで空虚ちゃんたちの事忘れてたな
ちゃんと病室で寝てるかな

そんな事を考えながら僕は研究所を後にした

紅蓮 side continue

とある紅蓮の裏方作業（後書き）

紅蓮さん強いですかね？

僕的には一番強くしているんですけどねww

感想をお待ちしております！

とある紅蓮の部屋訪問（前書き）

界理君の事件解決から数日後の話です

ではどうぞ

とある紅蓮の部屋訪問

紅蓮 side

「ちょっと界理君^{かいり}の家にでも行かない？」

「私^{わたし}はいいけど霜月^{しもつき}はどうすんの？」

「私もいいわよ。どうせ暇だし」

今僕たちは第7学区の喫茶店でお茶しています

しかも空虚^{くうきょく}ちゃんと沈利^{しんり}ちゃんの二人で

しかも二人とも美人なので店の中の男性陣が鼻の下を伸ばしてチラ見てきて目障りです

ちよつと優越感もあり

「この頃界理君のこと見かけないからさ、ちよつと心配じゃない？」

「別にあいつが死のうが関係ない」

二人できつちりハモりました

しかも内容えぐっ！！

まあそこがまた彼女らの魅力^{みりよく}なんですけど

それはともかくどうしてこんな事を言ったのかは、つい2、3分前までさかのぼります

2、3分前

「そう言えば、界理君から仕事の報告受けてなかったな」

はい、終わり

ただの報告ついでの嫌がらせです

そんな事で僕たちは店から出て行きました

20分後

歩いてやっと着いた

彼女らは疲れたのかベンチに座っている

「もうすぐ部屋に入れるからがんばろ」

「行くよ麦野」

「あーだりー」

そう言ったもののちゃんと着いて来てくれた

界理君は結構高級な職員用マンションに住んでいる

6階の界理君の部屋の前に着き、冬用コートで隠れた腰ポーチから細い針金を取り出した

「あ、あんた鍵持っていないの？」

「いんや、持ってるけど使わないだけ、こつやって…こつやって…こつ」

ガチャッ

「よし、開いた♪」

我ながら上出来だ

針金をポーチに戻してドアを開けた

「おっ邪魔しまー………」

絶句したね

これほど物事をど忘れしたのは久しぶりだった

その人物を見て僕は口をだらしなく開けたまま固まった

そこに居たのは金髪美少女——ティアちゃんだった

紅蓮 side continue

とある紅蓮の部屋訪問（後書き）

この後から細かい日にちがわかります

とある紅蓮の空中飛行（前書き）

今回はとても短いです

ご了承ください

ではどうぞ

とある紅蓮の空中飛行

紅蓮 sided

僕は口を開けて固まったまま金髪美少女——ティアちゃんを見続けた

「わ、わわわ……」

「あ、」

今更気づいたけど彼女、下着姿だった

「うわ————ん!!!!」

「あ、ちよっとー」

バタンッ

……。
……。

リビングに逃げられた

しかも泣きながら

これって僕が悪いみたいじゃないかな!?

「どうかした紅蓮?」

「あ、沈利ちゃん」

そう言ってドアと僕の隙間から中の様子を伺ってきた

あまりにもティアちゃんのインパクトが強すぎてドアの向こう側の彼女らをすっかり忘れていた
ちよっと泣き顔の僕を見て沈利ちゃんは引いていた

「ちよつと待つて、今それやられたら本気で傷つくからやめて!!」
「お前に傷つく心があること事態信じられねえよ」

ほんとに沈利ちゃんは僕に冷たい
こんな僕にもガラスの心があると言っのに
気を取り直してお邪魔しよう

「とりあえず空虚くうちゃんと沈利ちゃんが先に中に――」
「「とりあえず紅蓮、前」」
「え？」

女の子二人から前を向けって言われて前を向いた
それより空虚ちゃんは、いつからドアを通り抜けて僕たちの事見たの？

それはさて置き

何とそこには『鬼神』と言われても納得するくらいの顔の人物が居た

「つて、界理かいりく――」

「朝からうるせーんだよ、このボケえー!!」

「ゴフツ!!」

腹を殴られたとわかった時にはすでにお空を飛んでいた

それにしても手加減してよ、界理君
て言つか絶対『断絶空間セバレート』使って殴ったよね？
めっちゃくちゃ痛いんですけど

その後僕は結構な距離を殴り飛ばされて、しくしくと一人悲しく界
理君の部屋まで戻っていった

紅蓮 s i d e e n d

とある紅蓮の空中飛行（後書き）

これで紅蓮さんの話はおしまいです

次からまた界理さんの話です

とある界理の友人来客（前書き）

今回からまた界理さんのお話です

ではどうぞー！！

とある界理の友人来客

界理 side

ドタドタドタ バンッ

「界理かいり、知らない人に下着姿見られたよー」

うえゝゝん、と泣きながら俺（ついでにティアも）の寝室に入ってきて俺の隣に座った
しかも恥ずかしげもなく下着姿で

「あつそ、ちゃんと服着ろ。じゃあお休み」

「少しは私の話聞いてよ、界理！」

その態度に怒ったのか寝ようとしている俺を叩いてくるティアだが完全に無視
やっと睡魔が俺を包もうとした時玄関のドアの方から聞きたくないやつらの声と名前が聞こえて意識が覚醒かくせいしてしまった

「——かした紅蓮ぐれん？」

「あ、沈利しずりちゃん——」

紅蓮たちはその場でごちゃごちゃと言いつつ合っていた
しかも人の家で

怒りで震える手を押さえて俺はベッドから起き上がりながら『空間転移』の演算を開始した
座標はもちろんあいつの目の前

『とりあえず空虛くうきょちゃんちゃんと沈利しんりちゃんちゃんが先に中に――』

ヒュンッ

「「とりあえず紅蓮、前」」

「え？」

いきなり現れた俺に目が点になっていた
ようやく冷静になり言葉をつむぎ出した

「って、界理く――」

「朝からうるせーんだよ、このボケえー！――！」

言い終わる前にちよつと（いや、かなり）本気で紅蓮を殴り飛ばす
殴り飛ばした紅蓮はさながらボールのように軽く20mは飛んで
いった

俺は飛んでいった紅蓮を視界から外しドアの前に立っていた麦野むぎのと
霜月しもつきに話しかけた

「おい、お前ら……何も見てねえだろうな……ああ？」

「「は、はいっ――！何も見てません――！」」

「はい、結構」

そこで俺は考えた

このままこいつらを追い帰してもいいのかと
それに何やらキッチンの方で音も聞こえてくる

『界理にお客様が！早くお茶の準備なくちゃ。で、でもさっき下
着姿見られちゃったし……ううー、なんか恥ずかしいな……って、

「おわあ！」

ガチャーン

『あー、お皿が！！』

とティアが無駄にがんばっているし
と言うか後でお仕置きだな

それに俺はこいつらを帰したらティアが可愛そうだと思ってしまった
ティアの健気な姿勢けなげに呆れているのかなんだろうか……

どこまであいつに世話を焼くんだろな、俺

少しの間考えた末に家に入れることにした

「ハアアー、入れよお前ら」

「え、入ってもいいの天道？てんどう」

「ああ」

「ラッキー、じゃあお邪魔しますー」

そう言つて二人の女子は家の中に入れた
リビングのドアを開けてまず見たのは……

「あ、界理君。お邪魔してまーす♪」

イスに座つて優雅にゆつがコーヒーをすすする紅蓮だった

「ちょっとこつち来い、紅蓮」

「え、何々？何かくれるの？」

テクテク（紅蓮がこっちに来る音）

ドゴツ（俺が紅蓮の腹を殴る音）

ドサツ（紅蓮が膝から崩れた音）

ブオン（開いてた窓から紅蓮を外に放り投げた音）

ガラガラ（俺が窓を閉めた音）

「フン、ゴミが」

「って界理、あの人死んじゃうよ！」

「あれぐらいで死んだら、俺も苦労はしねえよ。それとそいつらに何か淹れてやれ」

「あ、うん。わかった」

大人しくコーヒーを淹れに行ったティア

あいつが来てから妙に疲れた俺はソファーに座った

「1つ言って置くけど、今日俺ら出かけるから長居はすんなよ」

「そんな事僕だってわかってるよ。何たって界理君の愛の巢に……
ってその右手下ろして！」

「さっき外に放り投げたところだよな？」

その日、ある部屋から金属バットで殴るような音が聞こえたのはまた別のお話

界理 side continue

とある界理の事後報告（前書き）

今回はティアちゃん視点のお話もあります

ではござ

とある界理の事後報告

界理 side

「で、お前らは結局何しに来た？」

「そんなの決まってるじゃないか。遊びに来ただけ♪」

そう答えたのは先程まで俺にボコボコに殴られていた紅蓮ぐれんだ

コンクリの壁なら砕くぐらいの威力で殴っているのにまだへらへらしているのが腹立つ

それにどうせこいつの事だから仕事の報告がついでだろうと推測
そこで熱いコーヒーを飲みながら事件の報告をする

ティアはソファアに座って女子しもつき（霜月と麦野むぎの）と話をしているため
聞かれないだろう

「見ての通りティアを保護している。侵入者の方は1人が学園都市
外に逃走、その他は……まあ殲滅せんめつか？」

事務的に答えた

だが気がかりなのがあの時オレイカルコスが「どうやってあそこか
ら抜け出せた。あそこには強力な結界で隔離かくりしていたはずだぞ」

と言っていたため誰かが助けに来たのはわかっていた

犯人もとい協力者は紅蓮のはず

それに俺の関わった仕事でこいつが関わらないはずがない
だからこの報告もあまり意味がない

「そうかい、そうかい。じゃ、お疲れさん♪」

「あいよ」

「では早速、ガールズトークにも交ざろうかと……」

報告が終わり女子の輪に交ざろうとする不屈き者の手を掴んだ

「どこに逃げようとしてんだ？」

「え、えつと……ほら、ティアちゃんと親交を深めようとあの中に交ざりに行こうかなと」

「あつそ、勝手にしろ。それと誰の物かわかってんだろな？」

「『俺の私物に手え出すな』ってか？もちろんわかってるよ』」

ははは、と笑う

まずその無駄にイケメンなのがまた腹立つ

俺はソファアの方には行かずにテーブルに残った

眠たかったので眠る事にした

出かける時間になるまで

界理side end

ティアside

ガールズトーク中

「で、あなたはという経緯^{いきわづ}で天道^{てんとつ}と会ったの？」

「えつと、それは……」

今現在、2人の美人さんに質問攻めにあっています

主にポニーテールのスラツと美人さんとい霜月^{しもつき}さんから

霜月^{しもつき}さんは尋問^{じんもん}が得意なのか私は色々喋^{しゃべ}ってしまいます

「それよりもう十分私の事話したんじゃないですか？」
「何言ってるのよ。まだまだこれから」

そう言つてニコリと微笑みかける

誰が見てもほんとに美人である

もう1人の美人の麦野さんに至つては話を聞いて「うそ、まじ。あいつがそんなことするはずない、するはずない、するはず……」
と言いつける始末

それほどまで界理^{かいり}の評価は低いらしい

「それに話を変えようとしてもそうはいかないわよ、ティアちゃん
」

ばれだつた

「もう勘弁してください！私だけじゃなく霜月さんも教えてくださ
いよ」

「ふふ、ダメ。今日はティアちゃんの暴露会^{ばくろかい}」

愉快^{ゆかい}に楽しげに霜月さんは笑う

それに引き換え私は引きつった顔で苦笑い

そこにさっきの覗き犯もとい紅蓮さんがやってきた

やつとこの暴露会から抜けられる

そう思い私は紅蓮さんに話を振る

「界理とのお話は終わつたんですか？」

「うん、そんなに込み入った話じゃないしすぐ終わるようなものだ
つたよ、それより、僕の方はティアちゃんのお話の方が断然聞きた
いんだよね」

「は、あはは」

乾いた笑い声しか出てこない

この場を乗り切るには界理に助けてもらうしかない
そう思い界理の方を向いたがテーブルで寝ていた

この薄情もの……

「じゃあ僕にも最初っから教えてもらおうかな、ティアちゃん」
「もう勘弁してください」

その後、私は界理が起きるまであれやこれやを包み隠せず（ここ重要！）話してしまった
それより私ってこの人たちと初対面じゃなかったっけ？
そんな疑問が後悔しながら出てきた

ティア side continue

とある界理の事後報告（後書き）

コンティニューとありますが話の語り部は界理に戻ります

ややこしいですね

とある界理のお買い物（前書き）

ほのぼの回でしょうか？

二人でのお出かけです

ではどうぞー！

とある界理のお買い物

界理 side

「じゃあバイバイ、界理君^{かいり}、ティアちゃん♪」

「邪魔したな、じゃあなティア」

「またねティアちゃん」

「はい、また来てくださいね皆さん」

「2度と来んな」

結局昼が過ぎた辺りに帰っていった

と言うか帰らせた

ティアは玄関まで、俺はリビングのソファで紅蓮^{くれん}、霜月^{しもつき}、麦野^{むぎの}たちを見送った

俺の場合見送ったって言えるのかは問題だが

玄関から戻ってきたティアは俺に何も聞かずに隣に座った

「ハアーーーー……やつと帰ったな」

「ホントだね。それより、この後はどうするの？」

「どうするもこうするも、予定通りお前の生活用品は買いに行く」

「わかった、じゃあ出て行く準備するから待っててね」

そう言っただけ自分の部屋に行った

それよりもなぜ、数日たった今から行くのかは、ティアが体調が悪かったからだ

ついでに言っただけ俺も出て行けるほど体が動かさなかった

「準備できたよ」

「ああ、じゃあ行くぞ」

「うん！」

今俺らはバスに乗っていた

別に歩いても良かったのだがティアが「あれに乗ってみたい！」
と言ったため今現在乗車中

ティアは車窓からの街の風景を見ていた

「わー」

「あんまりはしゃぐな、目立つ。子供かお前は」

「わかってるよ、もおー。それに子供扱いしないで」

そう言ってこっちに向けてた顔をバスの窓に戻して再度街の風景を
眺める

俺らはバスの後ろの方に座っている

まだ学校が終わる時間帯ではないのかバスの中にはそれほど人は居
ない

ボーっとしてたら目的の駅に着きそうだった

まだ外を眺めていたティアに降りるぞと伝える

少し残念そうな顔をしたがうなずいた時にちょうど駅に着いた

「じゃあ降りるぞ」

「はい」

それから少し歩いたところで昼に何も食べていなかったのを思い出
し腹が減ってきた

別に俺は我慢ができるが、一応ティアに聞いてみた

「なあティア、腹減ってるか？」

「え、なんで？」

「昼飯食べてないだろ。だからだよ」

「うーん……じゃあどこかに入ろう！」

「ファミレスくらいしかねえけど」

そう言つて近くの手ごろな店を見つけてそこに入った

今現在時刻、1時ちよつと

今現在地、『セブンスミスト』前

「へー、おっきいお店だね」

「さつさと入るぞ。暑いし」

「あつ、待つてよ界理」

ティアはあわてて俺についてくる

中に入ると冷房がついていて涼しい

隣ではうれしそうな目で中を見渡しているティアが居る

「最初にケータイ見に行くぞ」

「…ケー…タイ？」

何を示しているのかわからないのか首をかしげる

ハー、とため息を吐き、面倒臭いながらも右のポケットから青色のケータイを取り出しティアに見せる

「なるほど、それを買に行ってくつてわけだね」

「ああ。だからさっさと行くぞ」

手に持っていたケータイをポケットに戻し歩き出す

それを見たティアは俺の隣まで歩み寄ってから唐突とつとつにおかしな事を聞いてきた

「ねえ界理、迷子になるのが怖いから手繋いでも良い？」

「……………」

一瞬反応に困った

だが今日は朝に色々な事が起きてめんどくさかったので、何も考えずに手を出していた

それを見たティアは少し驚いていたが、すぐに俺の手をとり歩き出した

「早く行こう、界理」

「あんまり引つ付くな、暑苦しい」

乱暴には言うが、剣呑けんのんとした態度では言い返せない自分が居る

そんな事は露知らず、俺の手を握りながらティアはうれしそうに顔をほころばせ一緒に歩く

界理 side continue

とある界理のお買い物（後書き）

部活も宿題もまだ終わらせていません

たぶん、次の更新が難しくなると思います

とある界理の荷物持ち（前書き）

何とか間に合わせる事ができました

ではどうぞー！

とある界理の荷物持ち

界理 side

今俺は隣に居るご機嫌きげんなティアを見ている
その手には先程、契約けいやくしたばかりの真新しい白色のケータイが握られている

「えへへ、はじめての界理かいりからプレゼント♪」

始終こんな感じでこっちの対処も疲れる
いい加減に現実に戻ってもらわなきゃ後々めんどくさくなる

「おい、いい加減に現実に戻れ」

「え、わっ！べ、べべ別にこんな物もらってもう、うっうれしく
なんかないんだからね！」

「テンパんな、バカ」

「あ、ごめん。ありがとうね」

やっと現実に戻ってきて買い物を再開する
思いのほかケータイの契約で時間を食った
次にどこに行くか思案する

一応こいつの買い物なので、隣で格闘しているティアに聞いてみた

「次どこ行きてえんだ？」

「えっと……服？」

「まあそうなるだろうな」

実はティアには服がない

今着ている服も俺が着れなくなった物を着ている
じゃあ下着はどうなっている？と言う問題が残るが……無視しろ
無視した方が後々のためになる

2時間以上後

「ふー、いっぱい買ったね界理」
「そうだな、俺のものはないけどな、全部が全部」

今の俺の状態を表すなら、マンガやアニメにありがちな両手いっぱい
に紙袋

右手に3つ、左手に2つ

その全部が服

「えっと次はなに買おうかな？」
「人の話を聞け、特に俺の」

もう服を買うのはやめさせたい
これだけあったら一夏は越せる量はあるだろう

「けどまだ『あれ』は買ってないよ？」

「『あれ』？……ああ、『下着』か」

「もう、せっかく隠して言ったのに。何でばらしちゃうかな？デリ
カシーがない男は嫌われちゃうよ」

「嫌われるのには慣れてるんでな、生憎とあいにく」

「皮肉ばかり。いいよ1人で行く」

「行って来い行って来い、そこらへんで座ってるからな」

財布をティアに渡し近くにあったベンチに座る
ついでに両手にあった荷物も床に置く
そのまま目を瞑り寝てしまおうかと思つたがやめる
ある事を考えて俺は自分の考えがバカらしくなる

「俺はどこまで甘くなるつもりだ」

床に置いていた荷物を拾いある店に足を運んだ

界理 side end

ティア side

「ふっふーん♪ いっぱい買っちゃったな。それに……………なやつも♪」

ニヤニヤしながら店を出る

だが運悪く小さな女の子とぶつかってしまった

「いたた…………て、大丈夫！」

「うん、大丈夫だよ。ごめんなさい、よそ見して走ったから…………」

「そうそれなら良かった。そのお人形わ？」

少女の手にはへんてこなカエルの人形が抱かれていた

「あ、これね。えつとめがねのお兄ちゃんが風紀委員のお姉ちゃん
に渡して、って言われたお人形なの」
ジャッジメント

「へー。じゃあお姉ちゃんも一緒に私に行つてあげる」

「ほんと！ありがとう、きれいな髪のお姉ちゃん」

「どういたしまして。じゃあいこっか」

少女の手を握ってその『ジャッジメント風紀委員』の人のところまで一緒に行く事にした

だがまだ私は知らなかった

その人形が私を事件に巻き込んでいる事を

ついでに界理の怒りの種になる事も

テイア s i d e c o n t i n u e

とある界理の荷物持ち（後書き）

宿題は早めに終わらせるほうが良いですね

後々がしんどくなってきます

が、この調子で次もがんばっていききたいです

それと、キャラ紹介で紅蓮さんに設定を追加しました
頭では設定はしていましたが中々話に出てこないのを忘れていた
ものです

とある界理の別々行動（前書き）

宿題よりこつちを優先する僕はいったいなんでしょう？

ではどうぞ

とある界理の別々行動

界理 side

今俺はデパートでティアを探している真っ最中
お供に新しく紙袋が増えている以外さつきとは一緒だ
何の紙袋かは教える義理はない

『オールチエック空間把握』で見つければ良いが、めんどくさい

ティアに意識をむけるのがめんどくさい
それに……って何でこんなにグチグチ言ってる――

ピンポンパンポン

『お客様にご案内申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、誠に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。係員がお出口までご案内いたします。お客様にはご迷惑をお掛けします事を心よりお詫び申し上げます』

いきなり店内放送が流れた

それを聞いた客はざわめきだしたが、一様に放送通りに従い始める
俺はこの時に嫌な予感がした

俺の悪い予感は良く当たる

「ハア―、あいつを探して家に帰るか、早急に」

通路の真ん中においては邪魔だと思っ端にのける
そこでティアを探すために意識をした

「ティアに何もない事を祈るが……」

俺は無意識にそんな事が声に出ていた

界理 side end

ティア side

『——の故障が発生したため、誠に勝手ながら本日の営業を終了させていただきます。係員がお出口までご案内いたします。お客様にはご迷惑をお掛けします事を心よりお詫び申し上げます』

隣で人形を抱いている女の子と一緒に『ジャッジメント風紀委員』の人を探していたら、そんな放送を私は耳にした

その放送を聞き、店内にいた客は文句を言いながらも放送にしたがつて外に出て行く

「ねえねえおねえちゃん、早く行こう？」

「あ、うん」

一番に界理かいりの事が頭に浮かんだがまずはこの子の用事を済まさないといけない

怒っていないといいけど……

すっかり静かになった店内には今は私と少女しか見えない

少女は辺りをきよろきよろと目を配らせていたら

「あつ、『風紀委員』ジャッジメントのおねえちゃんだ！」

「あ、ちよつと！」

よく見たら私からは見えにくい位置に頭に花束を乗せた人が立っていた

その人は電話で何やら話をしているようだ

私はまず少女を後を追った

少女はと言うと、その風紀委員ジャッジメントの女の人に人形を渡そうとしている所だ

これで一安心——にはならなかった

何とその人形が顔の辺りからいきなり歪いびつな形につぶれようとしていたとつさにその人は少女の手から人形をとり、近くに捨てた

「初春さん！うちはる！」

私たちが来た方とは別のところから新たに女の人と男の人が出てきたその初春と呼ばれた女の人は少女をかばうように抱きかかえ、別の女の人は手をポケットに入れてコインを取り出していた
だがこの状況で焦ってしまい、そのコインが手元から逃げてしまった人形の方は時間とともに次第に小さくなっていき、すぐにでも爆発しそうだった

テレビで噂の『連続爆破事件』があつたのは知っていたが、まさか自分が巻き込まれるとは思っても見なかった

こんな事なら無理にでも界理をと一緒に行動すればよかった

その後悔の波が押し寄せてきた時、唯一の男性が私たちの前に爆発から守るように立ちふさがった

そして人形は——爆発した

テイクア side continue

とある界理の別々行動（後書き）

この調子でがんばります

とあるティアの恐怖体験（前書き）

界理君よりティアちゃんのほうが長いのでこっちにしてみました。

ではどうぞー！

とあるティアの恐怖体験

ティア side

人形が爆発した

その時、ヒュン、と言う音と一緒に誰かがこの場所にやってきた爆弾は瞬く間に私たちのいる場所を破壊した前に出てきてくれたツンツン頭の人のお陰か、私たちには一切被害が出ていない

その事にほっとした所に、不意に人形による破壊が治まった何かを吸い込むような音と共に

よく見ると爆心地になる場所に界理かいりが立っていた

その彼の右手は光さえも吸い込むような漆黑しっこくだった

その音はまだ止もうとはしなかった

ようやく右手の黒い物が無くなり声をかけてみた

「か、界理？」

「.....」

「うつ.....」

明らかに怒っている

後ろ向きに立っている顔は見えない、けど明らかに怒っている

以外に無言の圧力つてあるものだと感じた

その事を感じた私は、後ろ向きに立っている界理に近づこうとした

「つて界、理？」

近づいたと思ったらいつの間にか界理の肩に担がれていた
ちょうど左肩にお腹が当たっていて痛い

それに腰に手を回されて、解ほどこうにも解けない

「え、ちよつと、界理！」

「おい、お前ら……」

「私の事は無視ですか！」

そんな事を言つたがそれも無視

せめてもの抵抗で手と足をバタバタ

それより今日の服装って……スカート！

より一層激しく動きました

けど界理はかまういませんでした

今思いますが、逆効果だつたと思います

程なくして私が歩いてきた方を向いて話した

「めんどくせーから後始末は任せる。俺のこと忘れろ。じゃあな、弱気な第4位」

「何で私の事、あんたいつたい何者よ！それに、その子を放しなさいよ」

「自分の事を話す気もないし、こいつを放す気も無い」

そう言い終わつた瞬間、私は見知つたところにいた

界理の能力で飛んで来たみたいだ

界理は私が履いていた靴を脱がし、ゆっくりと肩から下ろした

「買ってきた服はテーブルにある。出して洗濯機にでも入れとけ、洗つとく」

「どこかに出かけるの？」

「ちよつとな。すぐに戻——」

言い終わる前に界理に抱きついていた

界理は特にかまわずそのままでいさせてくれた

「怖かったよ。ホントに怖かったよ」

「……………ふん、へたれが」

憎まれ口をたたきながらも界理は私の頭に手を置いてくれた
それはとても優しく温かった

界理は頭に置いていた手をどけてそのまま玄関から出て行こうとした

「それとこれ」

ポイツ、と私に向かって投げたのは――下着が入った紙袋

「か、かかかか界理!」

「ヒヤハハハハ、ちゃんとしとけよ」

そう言つて界理は玄関の向こう側に消えていった

ティアside end

界理side

今俺は酷く腹が立っている

久々に街に出て、ティアと一緒に買い物をしている時にあの爆弾騒ぎ
あるう事が俺の私物まで傷つけられるところだった

今頃は捕まっているであろう

だが関係ない

自分が犯そうとしていた事の代償
死を持って償わせる

「大丈夫かい、そんな険しい顔して？」

どこからか声が聞こえた

街で聞く。それは親切な人に心配してもらっているというイベントだ
だがそれは「街」で聞くことだ

だが俺は今、ビルとビルの間を跳んでいる

そんなやつに声をかけれる者は異常なやつ以外いない

「そんな君にプレゼントをあげよう」

またも発生源がわからない声が聞こえる
意識をして近くの間を視る
そこにいたのは満面の笑みの――

紅蓮^{くれん}だった

「ちょっと頭冷やそうか、界理君」

界理 side continue

とあるティアの恐怖体験（後書き）

明日から学校です。

嫌ですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9904s/>

とある都市の三点分岐《Triple Road》

2011年10月9日01時37分発行